

---

# センター姫とスマーリ王子

yuzoku

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

センター姫とスマール王子

### 【Zコード】

N7987U

### 【作者名】

yuzoku

### 【あらすじ】

デカいってだけで今年新設の女バスに入部させられたバスケ初心者の小泉ヒメ。でも意外とバスケットおもしろいかも！？一方小学校のころからバスケ一筋もといドリブル命の王地大河、通称オーデジ。二人はバスケを通して絡んだり交わったりすることで、成長し合つたりしなかつたり。。

## せりわれ……ではなく勧誘される姫（前書き）

「はるか3rdシューター」のその後の翔泉高校を描いておりますので一部「はるか」の登場人物がでてきたりします。しかし主人公たちは入れ替わっていますのでどちらから読んでいただいても楽しめるようにはしています。

なお、この小説は男女2人の主人公が交互に「語り」になっていきます。

## わらわれ……ではなく勧誘される姫

「あなた、バスケに興味ない？」

入学式が終わって早々、同じクラスの人がいきなり声をかけてきた。  
いきなり話したこともない人からこんなことと言われたから正直面喰つてしまつて、すぐには何の返事もできずにいた。  
「その身長、バスケだとかなり武器になるんだよねー。スッ『ゴイ』うちら  
やましいなあ。ねえねえいくつあるの？」  
「身長は一八一センチだけビ。」

正直身長は昔からネタにされてからかわられてきたので私にとってはトライアフマでしかなかつた。

「うわ、やつぱりスゴイーなんか迫力あるなつて思つてたんだあ。  
あつ、」めん名前も言つてなかつたね。アタシの名前は塙見怜しづみれい、氣  
軽にレイつて呼んで。よろしくね！あなたの名前は？」

「小泉陽愛。こいずみひめ」

そして、その身長に似つかわしくないこの名前も氣に入つていない。

そんなことはおかまいなしにレイはしゃべり続ける。

「わたし去年のウチの高校の男子の試合みて感動したんだよね！そ  
れであたしもあんな風になりたくてこの高校入つて、それで女子でもバスケ部を作つと思つているのー。あなた身長もあるみたいだし  
やってみない？」

「え、でもあたしバスケなんてしたことないし……」

「その点なら任しといて！」の、プレーヤーとしてもゴーチとして

も超一流のあたしが、ビシバシ指導してあげるからー！」

なんか厳しい練習になりそうで不安だったが、高校に入つて何か打ち込めるものがほしいと思っていたのも事実だったので、なにか強引であるが彼女の要求をのむことにした。

「よかつたあ。これで有望な新人第1号ゲットだわ。」

えつ、もしかしてあたしでようやく勧誘1人目だったの？なんだか不安が増してきた…

こうして、男子バスケ部の全国出場の陰に隠れて全然話題にならなかつたけど、実は女子バスケットボール部も今年から新設されたことになつたのだ。

## 強気王子

オレの名前は王地大河。<sup>おうじタイガ</sup> 翔泉高校のピカピカの1年生だ。

オレが入部している翔泉高校男子バスケット部の先輩たちは、今年見事全国出場を果たした。

そんな華々しい結果とは対照的に、しかも同じ一年であるリョウスケがベンチ入りして試合でも活躍する中、おれ達は毎日のようにランニングや筋トレといった屋外練習ばかりが続いていた。

もちろん先輩たちの試合は全国大会に行つても一生懸命声を枯らして応援したし、負けてしまった時はやっぱり悔しくてしょうがなかつた。

しかしこれでようやくオレにもチャンスが回つてくるかと思つとわくわくの方が大きかつた。

話は4月の入部期間に戻る。

オレは他の一年が自己紹介する日、運悪くといふか勘違いで一日遅れで入部した。ちなみにオレの身長は168センチ。それでポジションはSF<sup>スマートフォワード</sup> 希望だと言つたら、当時のマネージャーのサヤ先輩に、「その身長で男子の高校バスケをやってるのはかなり厳しいと思うから、これから覚悟しどきなさい。ま、前例がなくはないけど。でもガードじゃなくてフォワードで続けてくがどうかはよく考えときなさいよね。」と言われた。

でもオレはあきらめる気なんかなかった。だってSFって言つたら

一番スマアラーとして活躍できる花形ポジションだし、それにドリブルには正直それなりの自信があった。

しかし元キャプテンであるショースケ先輩のプレーを目の当たりにすると、自分の認識がいかに甘かったかを思い知らされることになる。

でもそれで燃えてくるのがオレなんだよね。さあ早くガンガンコートの中で練習してドリブル磨いて、どんな敵のディフェンスも、シユースケ先輩さえもわざと抜かしてやるぜー

さてと、今日も張り切って校庭の10km走行つてきますか！

## 今度は勧誘する側の姫

「バスケに興味ありませんかー？」

「今なら即レギュラー決定ですよー！」

あたしは今校門前でレイと声を張つてせつせとチラシ配りをしている。

そう、部活動勧誘だった。

正直人前に出るのが苦手なあたしにとってはかなり恥ずかしい作業だった。

しかしバスケに興味ある人なんてそういうおらず、当然いろんな反応が返ってくる。

「すいません、私そんな大きい人と一緒にやつていける自信ないです。」

レイがボソッと言った。

「あちや～ヒメを最初に引き入れたの失敗だったかな～」

おいおい聞こえてますゼダンナ。いろんな意味であたしにダメージのある勧誘活動であった。

そんな中、一人の女の子が一いちょうを見つめている。レイが田代とく見つけて駆け寄る。

「もしかしてあなたバスケ部入部希望？」

「はい。」

「経験者だつたりする?」

「そうです。SGやってました。」

「おお〜! 即戦力ゲットだぜ!」

レイのテンションはダダ上がりだ。

「ちなみに男バスとは交流とかあるんですか?」

「う〜んまだこれからだし分かんないけど、コートの関係で合同練習とかはやるんじゃないかな?」

そのとき、彼女がなぜか小さくガツツポーズをしているのが目に入つた。

## 巻き込まれ王子

「オージ、オージー！」

「『オージ』って呼ぶなあ～オレには『タイガ』っていうカッコイイ名前があるからそっちで呼べって言つてんだろが～！！！」

「わかつたよ、オージ」

全然わかつてねえ。この天邪鬼ヤローは本木元氣<sup>もときゲンキ</sup>。なんか親の離婚やらで途中で苗字が変わったせいで、読み方によつちや『もときモトキ』とかなりオモシロい名前になつてしまつ。哀れなオレの友人A。その腹いせなのか知らないが、人を変なあだ名で呼ぶのが得意技なようだ。

「で、人の名前連呼しといてなんだよ？」

「ねえねえ、かわいい子見つかった？」

「はあ、なんだよそれ？オレは今バスケで忙しいの！」

「連れねえな」。それにバスケ部つたつてこの3日間走つてばつかなんだろ？

「ばかっ、これからオレはマートで縦横無窮<sup>マツヨウムジク</sup>に活躍する田のために

だなあ。

「はいはいはい、悪かったよ。それより聞いてよ、オレもう恋しちやつた。」

「まじかよ。どんな奴だ？」

「7組の宇野紗彩ちゃんていうんだ。これがまたスタイルよくて、めっちゃかわいいんだ。」

「へえ～。

『かわいい』と言われるところひとつと氣になつてくるのは悲しき男の性だな。

「決めた、オレ告白してやる。」

そうこうと全力ダッシュで教室を飛び出してきた。  
まったく氣の早いやつだ。

3分後帰ってきた。

「どうだった？」

「ふられた～～」

「だらうな」

いきなりだしフラれるのは当然だらう。残念なことに別にゲンキはイケメンでわけじやないし。

それより気になるのは

「なんて言つてフラれたんだ？」

「『『』めんムリ。』の一言」

容赦ねえな～。一度その言動とギャップのある顔だけは拌んでおこう。

「ああもうオレはダメだ～～」

「そんな落ち込むなよ。名前通り元氣出せって。」

「そういうこと言わると余計テンション下がるぜ～。あつ、そつだ！」

なんだ！？急に立ち上がりつて。

「オマエも誰かに告白して来いよ。」

「はあ？」

「それでフラれて一緒に仲間にならうぜオイー！」

「イヤに決まつてんだろが――――！」

クラス中に声が響いてしまい、告白せずとも十分に恥ずかしい思いをすることとなつた。

## HIMEと出会い、怒れる森の姫

「それでは学級委員長を決めたいと思います。誰かなりたい人いませんか？」

クラス内は変に静まり返っている。新学期になるたびに小学校のころから経験していることだが、いまだにこの空気に慣れたと思えることはない。

「じゃあ推薦で誰かいないか？」

先生強引すぎるよ。まだみんな知り合って数日なのにそれはムチャなんじやないかな。

ま、あたしは関係ないから早く決まってくれさえすれば何でもいいんだけど。

そのとき一人の女子が言った。

「ヒメがいいと思います。」

このクラスであたしのことを『ヒメ』と呼ぶのは一人しかいない。そう、犯人はレイだ。

「じゃあ小泉でいいか。」

センセイちょっと待てえ～～い！

と言いたいところだがこんな時発言する勇気がない。しかたないがこの流れだと決定みたいだつた。

あたしが決意を固め始めたとき、今度は男子の声がした。

「男子はオージでいいと思いま～す。」

「ちょっと待てえ～～い！」

あたしが考えたのと同じツッコマリヤッとする。

「おれは断固そういうメンడクサ…責任の重い仕事はバスケ部が忙しいのだとあなたあります！」

「…そうそう、部活との両立は大変だもんね…ってそれはあたしも一緒にないか！」

「…そういえば『トイツバスケ部なのに小さいな、たぶんだけど170センチもないな。』

…あれつ、こんなと組まされたらただでさえ大きいアタシの身長が余計に目立つてしまつー！

「すいません、あたしもバスケ部で忙しいのでお断りをせていただきます。」

「なんだ二人ともバスケ部なのか、それならちょうどいい。協力してがんばってくれ。」

なにが「ちょうどいい」だ。ヤバイヤバイ、話しがどんどん悪い方向に流されていくてる…

「『姫<sup>プリンセス</sup>』と『王子<sup>プリンス</sup>』で『プリプリコンビ』だね

わつきの『オージ』推しの男子が余計な」と言つてきた。

「てめえ余計なあだ名つけてんじゃねえよ！誰がこんなデカいだけでバスケやるようなバカ女とガツキューイインチヨーなんてやつて

られるか!」

「ここにあたしもキレた。」

「誰がバカ女よ。自分こそ、その身長の割にその『テカ』い態度どうとかしなさいよ!」

「身長のことは今関係ないじゃねえか!」

「なによ、先にケチつけてきたのそつちじやない!」

「オージ、やつたれやつたれ!」「ヒメー負けんなー!」

そこ、外野うるさい!っていうかいつの間にか『オージ』相手に一人で口げんかになっていた。

「うん、息もぴたりみたいだな。それじゃよろしくな『プリプリコンビ』」

先生がそういった時にはもう決定的だった。

## 筋トレ王

放課後、部活の練習前に同じ一年の久保田一輝に愚痴っていた。

「つていうわけで見事その女バスのデカ女と学級委員ヤル羽田にな  
つちまつたんだ。」

「えつ、でも女子のバスケ部なんてウチの高校にないだろ?」

「それが今年部員集めて作るんだってさ」

「へえ~、ちょっと楽しみ。」

「どこがだよ? 『一ト狭くなつたりしたりひとつするんだよ。』

「だつてだつて仲良くなつて付き合つたりとかできそうじやん?」

「ヨイツもオレと同じS.F.スマールフォード希望らしいけどぜつてえ負けたくねえな。

いつものように10km走と筋トレを終わらせたおれ達に、今日は  
女子マネの「ハル先輩からいつもと違う指示があつた。

「一年生のみんなあ、ボール持つて外に出てきてください。」

よししゃー、よしやくバスケ部らしい練習できる! なにせ今までず  
つとボールすら触らせてもらえなかつたからな。しかもオレが一日  
遅れて行つてなかつた日には、一年の実力を見るためということで  
紅白戦があつたというのだから余計にフラストレーションがたまつ  
ていた。

「これからあなた達にはドリブルで10mで抜いてもひづり練習を  
してもらいます。ディフェンスになつた人はそれを止める役目ね。」

「はい!」

「なお、待機中はずつとダムダムしてゐ」と。

「はい!」

最初オレはオフェンスからだつた。  
待つてましたー！とばかりに思いつきりつこんでいた。そして  
ディフェンスを華麗に抜き去つた。

「うん、なかなかよろしい。」

コハル先輩からもお褒めの言葉をいただけたぜ！

続いてディフェンスだ。相手はカズキ。絶対止めてやる。  
最初カズキはその場でゅっくりドリブルをしていた。

そこから一気にスピードを上げてオレの左を抜けて行つた。

やられた。

見事なチェンジオブペースだつた。

「はい、抜かれちゃつたタイガくんは腕立て伏せ30回ね。」

まじかよ、さつき筋トレで100回こなしたばつかだつていうのに。

その後も何度もトライしたがオフェンスはともかくディフェンスはずたぼろだった。

けつぎよく今日腕立てを合計250回やるハメになる。

## よつやくバスケ部ができた姫

一週間の地道な勧誘活動の甲斐もあってか、ようやく5人の部員がそろった。5人というのはバスケをするのに必要な人数というだけでなく、新しく部として申請するための最低限の人数もある。ともかくこれで部員の問題はオッケー。次は顧問だ。

「失礼します！」

レイが迷いなく職員室に入つていき、あたしはその後ろについていく。

「誰か女子バスケ部の顧問になつてほしいんですけど。平塚先生どうにかなりません？」

まずは担任の平塚先生からだ。

「すまん、おれは今剣道部やつてるんだ。」

あっさり断られた。

「そうですか。じゃ あ誰かやつてくれる先生いませんか？」職員室中に聞こえるように言つた。いや、その声の大きさは迷惑だる。

「オレがやろう！」

一人の男性教師が名乗りを上げた。

「やつたー！ よろしくお願ひします！」

展開速いな、おい。

「3年8組担任の佐々木勝だ、よろしくな。バスケのことによくわからんがその熱意に応えようと思つたまでだ。」「なんだかちょっとカッコイイこと言つてる。

ここで確認のためいちおつ聞いてみる。

「でもそんな急なお願いなのに受けても大丈夫なんですか

？」

「問題ない！ なんたつてオレは女子が大好きだからな。」

前言撤回。ここはくそやローだ。

でも顧問をやつてくれるというのだから文句も言つてられない。実際レイはノリノリで手続きを進めている。

「とこうわけで今日からワタシ達5人で女子バスケット部をやつていくことになりました！ まずは自己紹介だね。ワタシは塩見怜<sup>しおみれい</sup>14歳。ちっちゃくともバスケへの愛は誰にも負けません！ ポジションはPG<sup>ポイントガード</sup>です。はい、じゃ次ヒメから」

「小泉陽愛<sup>こいずみひめ</sup>です。身長は181センチです。初心者ですがよろしくお願いします。」

「須藤朱音<sup>すどうあかね</sup>です。身長161センチでSG<sup>ショーティングガード</sup>やりたいと思つてます。勧誘の時に唯一話しができた子だ。アッシュの入ったオシャレなアシンメトリーの髪型が印象的だった。」

「宇野紗彩<sup>うのさく</sup>です。身長170センチ。中学の時のポジションはフォワードでした。」

さらりと伸びた黒髪がきれいだな。 といふかそれに負けないくらいキレイな顔をしている子だ。

「城ヶ崎美鈴<sup>じょうがさきみすず</sup>と申します。身長は172センチでJG<sup>ジョギング</sup>を希望しております。ポジションはPF<sup>パワーフォワード</sup>を希望しております。」

なんだか丁寧な話し方する子だな。 お上品そつ。

「はい、全員終わったね。じゃあまずははりきってランニング行ってみよ～」

ランニングはあたしだけがダントツで遅かった。そしてその後のメニューでも一人バテバテでこなしていくことになる。

「あ～だりい～」「だるいとか言わないの、それはこつちだつて同じなんだからね。」

今は放課後。でもいるのは体育館でも屋外でもなく教室。

そしてここにいるのはオレとこのデカ女の一人だけ。 残念ながら別に色気もなんにもないシチュエーション。

「小泉じやせんせん燃えも萌えもしねえ」「はあ？なんか言つた？」

別にい。

「なに、その感じ悪い態度！王地下で田頃からいつもそうよね」  
「『オウジ』って呼ばれるのキレイなんだよー下の名前で『タイガ』  
って呼べよな。」

!

なんだこれシンデレラか？まあいいや、『オウジ』って呼ばれなきゃなんでも。

「だいたいなんで遠足行くのに学級委員がイベント考えなきゃいけねえんだよ。」

「ぐだぐだ言つてもしようがないか。早く練習にも行きたいし、ちやつちやと考えて終わらせうぜ。」

— そうね。  
で、なんかない?

「はあ？ 考えるのオレかよ！？」 そうだなあ、バスケットボール2

個持つてつて2組に分かれてドリブルリレーとかどうだ？

「どんだけあんたバスケばかなのよ！－もつちょっとみんなが楽しめそなこと考えなさいよね。」

「じゃあお前なんかいの案あるのかよ？」

「そうねえ…」

といつたまま10分間ずっと黙り続けていた。

「おひまだかよ。でかなんか言えよ。」

「一生懸命考えてたのー。」んなのどうかしら、2組に分かれてバスケットボールのバス回し。最後はフラフープかなんかのリングにゴール。

「けつときよくお前もバスケじやねえか。しかもバス回しつて単純だな。これだから素人は！」

「つるさいわね！ドリブルだつたら足場が悪いとつまくできない子もいるでしょ。その点、バスなら誰でも気軽にできるから楽しめそうじやない？」

「そう言われればたしかに。」

「じゃあそれに決定でいいよね。」

「おう！」

「じゃあ先生への報告は任せたかい。」

「なんでオレなんだよ？」

「最終的な案を出したのはあたしなんだから肉体労働くらいやりなさいよね。」

なんか理不尽さを感じないでもなかつたが「バス回し」の案に賛成してしまつた以上、あまり強くは言えなかつた。

あとで先生のところに行くと、「さすがバスケ部同士の『プリプリ

「ノンビ」らしい発想だな。」と呟きってしまった。

## 計画HAN（後書き）

学級委員の2人はこんなふうに、ことあるたびに「活躍」させられるかもです。

## 汗水流してダムダムする姫

毎年部活ごとに体育館の使用割が決まっているため、新設であるバスは夏予選が明けるまでは当分体育館内での練習はなかつた。そのためあたしらは「一トは与えられず、古いボールを持つてもっぱら外で練習することになる。

「よし、ランニング終わり！」

「やつと終わつたあ。」

「ヒメ、そんなどらしない恰好しない！次の練習行くよー。」

監督もマネージャーもいないあたし達の練習はレイが全部考え、指示を出していた。

「じゃあ今から2対2でバス回しの練習始めるわね。ヒメはそこでドリブルの練習よ。」

ボールを使った練習の時は、初心者のあたしだけは別メニューで行われていた。

今日のあたしの個人メニューは「ダムダム500回（左右で1000回）」だ。

ダムダムダムダム。

ポロッ

あつ

「ヒメ、なにやつてんのープラスー100回だかんね！」  
「はい！」

自分の練習をこなしつつ、あたしの方にも田を光らせなんてなんて視野が広いんだろ。

P G つていうのはそういう能力が長けているのが重要らしいが、それだけでレイの選手としてのレベルの高さがわかる。

他のみんなにしてもパス一つとってもあたしがやると違つてならかだ。やっぱり経験者かどうかってテカいよなあ、特にサアヤの手さばきがハンパなく速い。

それについてあたしの練習は単調だな。

ポロッ

「ヒメ——！」

## 負け犬王子

今日はとっても嬉しいことがある。

いつもは屋外がほとんどの練習であるが、今日はなんと、コートが使い放題なのだ！

その訳はセンパイ達が練習試合で他校に行つてているからだつた。

休日の朝といつともあって一番乗りしてきたオレは、一人で何度もドリブルしてレイアップシュートを決めまくつていた。

そのとき外で女子の声がした。うん？女子バレー部も今日練習なんか？

「やっぱ体育館の中はいいよね。」

「久しぶりのリングだあ～」

5人いるうち知つてる顔が約2名。一人はチビで明るくてクラスでも目立つてる塙見怜。

そしてもう一人は、そう、デカ女こと小泉陽愛である。

とういことはこの集団はウワサの女バスか。まあ今日は空いてるしあつか側のコートで練習するんだる。

かまわず一人練習を続けていると徐々に他のやつらもやって來た。

「はい、みんな集合してください。」

「ハル先輩が声をかけると男バスのみんなが集まる。

あれ、女バスの子たちも来るぞ？」

「今日は男子も1年生しかいなくて人数も少ないので合同で練習を行いたいと思います！」

聞いてねえ～

男バスの面々はみんな驚いているがその後の反応はまちまちだった。特にカズキなんかは声に出して

「やつた――！」なんて言つから若干ひかれていたが。

キソ練が終わつた後、練習試合が組まれることになった。

「へ、ちょろいぜ。なんたつて相手は女子だ。しかも一人はトーシローのデカブツだし軽くヒネりつぶしてやるぜ！」

「ディーフェンス！ ディーフェンス！」  
ベンチスタートだった。

試合は意外と拮抗していた。レイがいいパスを出すので他の3人（もちろんヒメ以外）でうまく点をとれている。そのヒメにしたって初心者の割にしつかり足は動いている。少なくともキソ練はがんばつているようだつた。

「へえ、やるじやん。」

ちゅうと見直した。

途中コハル先輩から声をかけられた。

「タイガくん、出番だから準備して！」

「はい！」

ようやくきましたよ、本打ちが！

「タイガ、油断するなよ」

そう言つたカズキと交代した。

オレはお前と違つてフュミーストじゃないから遠慮なんかしないよ  
ん

お、オレのマツチアップ相手は黒髪の似合つひの子か。かわいいとい  
うよりキレイ系だな。

「サアヤつ」

レイからサアヤチャンにボールが渡る。  
行かせねぇよ！

クルッ

スピンムーブか！体をキレイに回転すると簡単に抜かれてしまった。

今度はこちらのオフェンスだ。ボールが回ってきた。  
さつきのお返ししてやんよ。

クルツ

スツ

ステイールされた?

その後もサアヤチャンを一回も抜くことはできなかつた。

## ホメられて伸びる姫

練習試合を終えたあたし達は男子より一足お先にあがりにした。なにせこひらは5人ぎりぎりでやっていたのだから当然である。

「よおし、これからミスドで反省会をやりまーす！」

一人だけスタミナありあまつてゐる輩がいた。

レイだ。いつたいあの小さい体のどこにそんな力があるっていうのか。

「まず今日の得点クイーン、サアヤさん心境はいかがですか？」

「相手がしょぼすき。」

「つわあ～きつといねえ。でもTFはそれくらいだと頼もしいよ。」

「お次はアカネ。ほとんどゴートで練習してなかつたのによくあれだけ3点セシユート決めてくれたね。」

「家の近くにゴールネットがあつてリングコートで毎日ショート練習は欠かさずやってきたからね。」

「さすが啊。澄ました顔して生糰のバスケットプレーヤーだね。」

「そしてミスズ。よくヒメのヘルプもこなしつつ相手のフォワード陣に負けなかつたね。」

「いえ、私の家には専門のコーチがいていつも厳しく指導してくれていますからあれくらいなんともないですよ。」

そこで他のメンバーはあ然とした。「専門の「一チ」だと？」

「前から思つてたけど、あなたの嫁つて結構お金持ちでしょ？」

「いえ、そんなことないです。家にもバスケットボールは一面しか

ないし……」

いや、十分すぎるだろ。

「さて最後は

最後に発表されるつていうだけで妙に緊張する。

それなくたって、たくさん上からシートを決められだし、攻撃  
なんて参加すらできていなー。

内心何を言われるかドキドキである。

「ヒメ、よくやつたよ。」

「レイモンドに何か思つてん？」

「せつですよ、ヒメちゃんのがんばりこなじっくこなしました。」

ミズズ優しいなあ。

「やっぱ一歳越えがいると頼もしいよ。」

これはアカネ。嬉しいけどいちいち身長を強調するんじゃないー！

「やっぱスポーツはホメて伸ばすのが一番だからね。でもやっぱ言つたことは決してお世辞じゃないよ。初心者なのによくがんばってくれたよ、ありがと。」

涙腺がやばいかも。

「よし、これで身長も一九〇センチには伸びたんじゃないかな？」

「なつてたまるかーーー！」

常識的に入りえないだろつてこつシッ ハハハ、オトメとしてはこれ以上身長が伸びてほしくないといつ願望からくる叫びだった。

昨日の合図練習はこつこつなく疲れたぜ。

そんなオレを休ます気遣いもなく、ゲンキが揚々とやつてきた。

「なあなあオージ聞いてくれよー。わっせ廊下で宇野紗彩ちゃん見たんだけどやつぱりかわいかつたあ。」

「ふられたのにまだそんな呑氣な！」と叫んでんのかよ。」

今まで頭がボーッとしていたが、ijiドオレは気づいた。

「うえっ、もしかしてお前が言つてた『宇野紗彩』って女バスの『

サアヤ』のことか？」

「たぶんそんなにない名前だから同じだらうな。」

「見た目どんな子だ？」

「黒髪のロングで前髪はセンター分けで、田はパツチリしてて鼻筋は通つてて唇は薄いんだよね。そんでもって手足がスラリとながいんだよなあ～」

「やっぱしそうだ。」

「でも女バスなのかあ。こつぺんプレーしてるとこも見てみたいな

「やめろ～～思い出せやんなあ～～！」

「じつしたんだよまたそんな騒いで」

先日ijiがびっくりされたことを説明した。

「まじかあ～ますます魅力的に思えてきたぜ、サアヤちゃん。それ

にしても女子に負けるつてお前やばくないか？」

オウジタイガに痛恨の一撃。

「「ひぬせえ、ほつとけ！」

」の言葉をしぼり出すのに10秒かかった。

追い打ちをかけるかの「ごとく、毎休みにコハル先輩に呼び出された。

「昨日の試合はボロボロでしたね。」

「はい。」

心がズキズキする。

さらに何を言われるのだろうヒヤヒヤしていると、ボストンバッ  
クを渡された。

「なんですかこれ？」

「強豪校やプロの試合を集めたDVDです。昨日の試合を見て確信  
しました。タイガくんはドリブルのスピードはかなりいいですが、  
フェイクなんかの小技がなさすぎです。要するに動きが単純すぎま  
す。」

「はい。」

これ以外なんもいえねえ

「これを見てディフェンスの動きを見て予測できるようになつてく  
ださい。それと同時にドリブラーの使い方も勉強してください。  
両方ができるればドリブルだけでなく、ディフェンスの方の強化にも  
つながるハズです。」

「わかりました」

「それでは」きげんよつ

この大量のDVDは見るだけでも骨が折れそうだ。

## 初めて人前でプレーする姫

いよいよ地区予選の一回戦が始まることになった。  
あたしにとっては初の試合である。

「ヒメ大丈夫？」

レイが声をかけてくれる。

「おおお落ち着いてるわよ、なに言つてんの。」

「フフフ。ほんとヒメ見ると飽きないわあ～」

「ちょっとアカネ、それどういう意味～？」

「どうもいつもそのままの意味よ？ ビビりまくつてんのが顔に出ま  
くり。」

「バカにすんなあ～」

「あ～ヒメさん緊張がほぐれてきたみたいで良かつたですね。」

「え？」

『気づくと妙なドキドキ感は収まっていた。もしかしてアカネそのた  
めにわざと…』

「あ～おもしろかった。」

チガウ、やっぱコイツはあたしで楽しんでるだけだった。

いよいよ試合が始まった。

ジャンプボールは一番身長の高いこのあたし。

幸い相手は一七〇そこそこだったので競り勝つことはできた。

ただボールを送る先を間違えていきなり相手ボールにさせてしまつた、

「どんまい、しつかりディフェンスよ。」

負けた。完敗だつた。あたし以外は実力のある子たちがそろつてゐるチームだつたのに。あたしのところから点を取られまくつたのだから、完全にあたし一人足を引っ張つていた。  
5人。ぴつたりしかいないため交代もできず、あたしは後半足を動かすことすらできなかつた。

とにかく何もできなかつたという思いが強く残つた。

試合が終わつた後、みんなが落ち込んでいるあたしに向かつて「ヒメがんばつてたよ」とか、「これからまだまだあるじゃない」とか言われたのが余計に心苦しかつた。

## 慰め王子

「あ～ねみい～～」  
「オージ、どうしたん? 昨日遅くまでゲームにでもはまつてたん?」  
「ちげえよDVD見まくつてたら気づいたら朝になつてなたんだよ。」

「DVDつて。オージ朝からいやらしい～～」

「ばかっ! オレが見てたのはバスケのDVD。コハル先輩に指示されてずっとドリブラーの動きとか研究してたの!」

「ふ～ん、なるほどねえ。で、成果はあつた?」

「まだ見始めて数日だよ、そんなすぐに結果が出りや苦労しねえよ。」

「そりゃそうか、じゃあ引き続きがんばつてくれたまえ。」

「はい閣下。つてなんでお前上から田線で行ってくれてんだよ～」

「こんな感じで今日も平和に学校生活を送つていた。」

そして放課後。授業中たつぱり睡眠はとつたので元気満タンだ!  
これで今田も部活にガンガン打ち込めるぞ!

と言いたいところだが、またしても「学級委員のお仕事」でヒメと居残ることになった。

「だからこいつはこいつした方がいいよな。」

「うん、そうだね。」

「ではこいつはこいつしよう。」

「うん、そうだね。」

「おこヒメ、わつわからぬ前「「うん、そうだね。」しか言つてないぞー」いつわせ早く部活したいのこのやこと仕事しつひよな。」

「「うん、わうだね。」

「だあーもうなんだつてんだよ。」

オレはここらこらしく思つてつづりトランパンをかましてやつた。

「痛つーなにすんのー。」

「そりゃこいつのセリフだよー。わつきからボーッとしたまんまで使い物になりやしねえ。」

「なによ、女子に向かつてそのセリフ失礼じやないの?」

「こんなときに男子も女子もあるか! いつたいビーナスしたつてんだよ。なんか悩み事でもあつたのか?」

「べ、別になんにもないわよー。あんたにそんなこと聞かれる筋合いはないわー。」

「じゃあ、もつとシヤキッヒシウヨナージャなこと学級委員の仕事終わんないだるー。」

「「うん。」

あれ、いつもと反応が違つ? こつもだつたらもつからつと聞こ返してくるはずなのに。ほんとになににあつたのか? といつあえず話題を変えようと思つて聞いてみた。

「「わつこえぱー」の前の地区予選の試合だつたんだよ?」

「「うぬわこーアンタに関係ないでしょーー。」

今度はキレイてきた。ほんとなんなんだよ。

「もしかして派手に負けちゃったとか？」

「…うふ。」

「え？」

「ねつだつて言つてんのよーあたしのせいでボロ負けだつたのよー。」

やばこ涙田になつてゐる。

「「」、めん悪かつたよ。」

「あたしもうバスケやつてく自信ない。」

「そりゃ初心者で初めての試合だつたんだもん、できなくて当然だ。」

「でもあたし、レイに身長高いからつて期待されて入つたのに、試合でなんにもできなかつた。」

「バスケは経験積んでナンボだぜ？いくらお前が身長高くて有利つて言つたつてそんな簡単には活躍できねえよ。実際チームメイトも誰もお前を責めたりしてないだろ？」

「たしかに、それはそうだけど…」

「じゃあこれからがんばりやいいじゃないか、お前もみんなもまだ一年なんだし一緒に成長していくば。」

「そうね。」

「」の口初めて笑顔を見せた。

「じゃ、すつきつしたとこで練習激励のためにちやつちやつと仕事終わらせますか…」

『スニーカー』

## 再びおひめから煌めぐ姫

学級委員の仕事を終えた後、急いで部活に向かった。

さつきまでの沈んだ気持ちから解放された反動か、なんだか心も体も軽くなつた気分で今日は久しぶりに気持ちよく汗を流した気がする。

練習後、アカネに聞かれた。

「ヒメ、今日なにかいいことあつた?」

「え? なによ急に。別に何もないわよ。」

「今日の練習はなんか動きよかつたわよ。」

「べ、別にいつも通りだし。」

「いやアンタこの前の試合負けだからずつと落ち込んだままで、練習も気持ちが入つてなかつたよ?」

「そうなのよ、クラスでもずっとふざけこんじやつててさ。バスケ誘つたあたしとしてはちょっと責任感じてたんだからね。でも放課後まで元気なかつたし、もしかして変わつたのはタイガくんと一人で居残つてたとき?」

レイがにやにやしながらこちらを見てくる。

「ち、違うわよー自分でさつき気持ちを切り替えたのー!」

「あらあら~その反応はますます怪しいですね~。」

「なんのこと言つてるひつひつのよー。」

「ヒメミズズがこつこつして言つた。」

「それはすばり恋ですね~」

「ちつがく~う、誰があんな生意氣くそチビ男なんかを!」

「あ、もしかしてウワサの『プリパコモンビ』?」

「アカネ、その名前でもう一度呼んだら本気でキレるから。」

「お~コワイコワイ。」

「あたしはバスケマジメにやつてくれればなんでもいいんだけど。」

「サアヤ~、あんたのそのクールなとこ大好きよ!」

「ただ自分より身長の低い男ってのは物好きよね、アンタも。」

くそつひとつ多いぞ、冷血女め。

「よ~しヒメも元気になつたところで明日からメーク一増やすからね~。」

部長の鬼発言に、あたしは元気にならなきやよかつたと少し後悔した。

## 憧れ王子

優勝した。

我が翔泉高校は県予選を勝ち抜き、県内ナンバーワンになつたのであつた！

それを応援席から眺めていたオレも少なからず興奮を覚えた。

早くオレもコートの中でアレを味わいてえ。

3年生が引退した後、キヤプテンを任せられたのはソーマ先輩だった。元キヤプテンであり、オレの一番の憧れであるシユースケ先輩曰く、「高校からバスケを始めたお前だが、一番チームのことを見られてるよ。」らしい。

やつぱりシユースケ先輩言つこともかっけーー！！

こつじて新チームとしてスタートしたオレ達だが、週末にはさっそく練習試合が組まれた。

「とにかく試合をこなす」というのが我がバスケ部の伝統らしい。と言つても2年前からの『伝統』らしいが。

「さよ、今日のスタメンを発表します。」

3年生のマネージャーが抜けて、この練習試合が初めてまともに指揮をとるというコハル先輩も緊張気味だ。

「PGソーマくん、SGリョウスケくん、SFカズキくん、PFジヨーくん、CIシちゃん」

カズキがスタメンかあ、ちくしょー！

ちなみに2年生はソーマ先輩、ジヨー先輩、イシちゃん先輩の3人だけだった。一年は全部で8人いる。

IIJでスタメンの簡単な見た目を説明しておぐ。

ソーマさんはPGの割に高い身長181センチだ。長めの襟足がちよつとかっこいい。

ジヨーさんは髪の生えている割に優しい顔立ちで身長は187センチ。

イシちゃん（この人だけはコーハイでも『ちゃん』づけオッケーになっている）は190センチだが、特筆すべきはなんといっても90キロある超重量級の体格だ。

あと一年一人は、リョウスケは170センチでロン毛、カズキは185センチで髪が左寄り（アシンメトリーとかいうらしい）な変な髪形をしている。

「新チームだからってびびつてんじゃないぜ、それは相手も一緒なんだかんな。いくぜっ！」

「うっすー。」

新キャプテンの一喝とともにコートへ入っていった。

ジャンプボールはジニアさんだ。

あつ取られた。

しかも速攻で得点を決められてしまった。

「なにとられてやがんだよ、××ついでんのかオラア」  
この声の主はコハル先輩だ。

説明しよう。コハル先輩は試合中はその長い髪をポニー テールにすることで鬼のような性格と口調に変貌するのであった。

「よーし、一本行つてみようか。」

そういうのさ気な発言とは裏腹に、ソーマさんから素早いバスが出される。

リョウスケが受け取ると、迷うことなくショートを打った。

いきなり3点セショートだった。

リョウスケの一発で勢いづいたウチは、そのまま一気に流れをつかんで新チーム初勝利をおさめた。

て、いか早く試合でてえ。

## 初心者の中でも光る初心者姫

「それでは球技大会のメンバーを決めたいと思います。」

そう、来週は球技大会だ。何が嬉しいって今回は学級委員の仕事が司会だけで済むってことなんだよね！」

部活の人は1チームに一人だけというルールがあるので、バスケはレイに任せるとして。

さあてあたしは何にしようかなあ…

「小泉さんバスケやつてよお～」

「え、でもうちにはレイがいるし…」

「いやいややつぱバスケは身長でしょ」

みんな口をそろえてそう言つ。

こいつらアホだな、人を見た目で判断するなんて。

レイもなんか言えばいいのに、澄ました顔で卓球の欄に自分の名前を書いている。

そして試合当日。

あれ、できる、できるや？

相手は初心者ばかりだったから、身長の分と2か月分の練習で他の人より動けていた。

今までチームメイトや対戦相手が経験者ばっかだったしあんま分からなかつたけど、ちゃんと上手くなつてるみたい。

ただしその自信は次の試合で無残にも打ち砕かれることがある。

次は7組、そうサアヤのいるクラスだ。

容赦なくドリブルで攻め込んでくる。つていうか他の子にもバス回してあげなよ、ホントとことんバスケには貪欲なんだから。

ところへ「ボコボコ」されましたとさ。

いやあう男子の方も応援に行くことになつた。

さてウチのクラスのチビッ子バスケ部は健闘しているのか？

「おいそこ走れ！」

「違う、今のは逆だ。」

ダメだ、全然チームメイトを使っこなせてない。少なくともこつにはPGの才能はないようだ。

ただ、ドリブルのキレは（ほぼ初心者の）あたしから見てもスゴイと思わせるほどのスピードだった。不覚にも一瞬かつこいつと思つてしまつたことは誰にも言わないでおこう、またネタにされちゃかなわん。

## 「ローン」王子

この前の決勝リーグの先輩の刺激を受けて、思い切ってローンロウにしてみた。

よく黒人のNBAプレーヤーとかがやつてゐる、頭全体をロックごとに何本かずつ三つ編みにしたものだ。

ただこれが大変なのなんなのって。

まずは手入れが大変だわ（頭がかゆくてしじうがない）、家族に猛反対されるわ（時すでに遅し）、街でヤンキーにからまれるわ（ホント怖かったあ～）、トイイことなしである。

さらにもローンロウにした翌日学校に行くと、驚愕のあまりみんなが声を失っている中、一人だけ違つ反応をしてきたやつがいた。

「アハハハハハツ！なにそれ、ウケ狙い？」

「バカ、ちげえよ、これはバスケットプレーヤーとして生きていく証だよ！」  
あかし

「ほんと意味わかんない！それで急に強くなつたとしても思つてんの？」

「ばか、これから練習でより気合い入れてやつてくれだよ！」

「なにそれアッハハハ、それにしても何回見ても笑えるわよ。」「

「つむせえ！」

くつそお、人の本氣をバカにしやがつて！くそつまたしてもこの手力女、腹立つわー！！

しかしこれで完全にあとには引けなくなつた。これから何が何でもレギュラーとつて活躍してやるつ！

## 意外な人にモテてしまつた姫

タイガに「一ーンなんちゅうでおもいつきり笑わせてもうつた日の放課後、あたしは違うクラスの女子に呼び出されていた。

さて、なにかしたかなと振り返つてみるものの、平凡極まりない生活を送るあたしとしてはなんの心あたりもない。

じれじれしながら指定された空き教室に向かつた。

そこには一人の小さくてかわいらしい女の子がいた。身長はレイと同じくらいか？

「あの、あたしを呼んだのってあなた？」

「…はいそうです。」

顔をよく見るがやっぱり知らない子だ。

「…で、ご用件はなんでしょうか？」

「あの、好きです！」

一瞬固まってしまった。それから頭の中はこの「好き」に対する一口イロな意味を考えていた。

「あのどういう意味で…」

「すいません！小泉さんはそんな気ないのはわかりきつてるんですけど、どうしても伝えたくて。あの、球技大会の時的小泉さんずっとかっこよかったです。」

「あ、ありがとうございます。」

「ほ、ほんとにそれを伝えたかっただけで、別にそれからはなにも期待してないのでキニシナイでく、ださい。あ～もう自分でも変なこと言つてるなつて分かつてるんですけど。」

「はあ。」

「とにかくわたしはバスケをしている小泉さんが好きです。陰ながらですけど応援しています。これからもがんばってくださいー。」

そつ言い残して去つて行つた。

なんか複雑な気持ちだった。たぶん彼女の方がもっと複雑な心境だつたのだろうが。

とりあえずあの子も言つてくれたようバスケがんばり。そういう心の中で改めて思った。

## インテリ? HAN

おれがせつかくはりあつてローンロウにしたのに、先週からテスト期間で練習は休みだつた。

ちなみにオレは抜群に成績がいい。

数学Aは87点、数学?にいたつては91点だ。ざつだ驚いただろうー。

他の教科?ナンデスカソレハ?

「あ～オージ英語赤点じゃんよ～！」

「ば、ばつか勝手に人の点数見んな！！しかもそれを『テカ』い声で言うんじゃない！…」

「セー、つるせいーしかも赤点を舐めるんじゃない！」

いやいやいやいや、自慢なんかいっさいしてませんけど、英語担当の鬼瓦先生は成績悪いヤツにはとことん厳しいことで有名だ。

それにも赤つ恥かくわ、怒鳴られるわでいい迷惑だぜ。仕返しにゲンキの点数ものぞいてみた。

98点だとー？

「ゲンキ、お前そんな頭よかつたのか？」

「ふつふーん、どうだい見直したかい赤点オージくん。」

くつ。悔しくてなんにも言い返せない。

「あ～でも100点とれたのになあ。まさか『basketball

「」の「b」を「d」と間違えるなんて凡ミスもいいとこだぜ。」  
うひー。なにを言われても由慢にしか聞こえない。しかもなんだそ  
のオレへの当てつけのような間違え方は。オレだけじゃなくバスケ  
をバカにされてる気分だ。

『シン

急に頭を殴られた。いつてえな誰だよと振り返つてみると、そこには鬼瓦先生が立っていた。

「まったく赤点のくせにテスト直しもせんといひやべるといひ度胸だな。お前は今回の範囲のテキスト丸々3回分を提出するこ  
と。わかつたな？」

「...はい」

世の中って理不尽だと想わない?

今日の英語の授業はテスト返しと「う」と、テスト直しが終わったら各自で自習ということになった。

なんか赤点がどうとかで騒いでいる、文字通りバカがいるが気にすまい。

割と点数の良かつたあたしはすぐヒメになり、レイとおしゃべりしていた。

「この前の球技大会なんであたしに譲ったの？ レイが出た方が絶対強かったのに。」

「そりゃあたしも出てみたかったけどさ。初心者ばかりを指揮するつてのも楽しそうだったし。でもそれ以上にヒメに経験つんでほしかったから。」

「え、どうに」「う」と？

「初心者ばかりとはいえ試合は試合でしょ。それに自分が一番バスクを知ってるという状況で、どうこうふうに動けばいいかも体験してほしかったし。それと少しは自信もついたでしょ？」

「なるほどね、レイもいろいろ考えてくれてるんだ。」

「そうよ~「自分に自信がないとなにをやってもうまくならん」がうちの中学生の先生の口癖だったから実践させてもうつたわ ヒメの場合、自信モテただけじゃなくて他にも『モテた』ことがあったみたいだけだ。」

いやいや顔でこいつを見てくれる。ホントこの子にはかなわんよ。

話題を変えようと思つていると、新学期のことを思い出した。

「…もしかして学級委員に推薦したのもそういうこと…？」

「あつたリー、アンタ見るからに自信なさげだつたし、人前にでも立つてもらつて度胸付けてもらおうと思つて。でもまさか『プリプリコンビ』なんて名物コンビが生まれるとは思つてなかつたけど。」

「ブブッ」

「その名前で呼ぶなあ……！」

「ヤニ、つるむねこちゃん…」

「すいません。」

鬼瓦先生の檄は女子相手でも容赦なしだ。

それにしてなんであたしの方が怒られなきやならんのだ。…たしかにうるさかつたけれども。

赤点だつた人は補習を受けるというのがウチの高校のルールだつた。御多分に漏れず、オレもこうして英語の補習にやつて来たわけである。

補習を受けるのは「べく一部の生徒なので授業は他のクラスの人と合同になる。なんか転校生になつたみたいで心細い。

そんな中、知つてゐる顔を見つけた。

「よおミノル。」

「お、タイガじやねえか、補習受けるなんてオマエバツカだな～」

「それはお前も一緒だろ！」

「そうだつた。ハツハツハツ」

どんだけのん気なんだよコイツ。同じバスケ部として恥ずかしいぜ。まあこの状況だけでいえばオレも同類なんだけど。

バスケ部2人が集まれば当然のことく（？）バスケの話題になつていた。

「しつかしこの前の練習試合でのリョウスケはすごかつたよな。」

「ああ、点が欲しいとこでいつもきつちり決めてくるんだもん。」

「さすが1年で唯一最初からベンチメンバーアリしただけあるよな。」

「たしかに、前の大会でもあのレベルの中でも全然氣後れしてなかつたし。」

「はあ～～オレも早く試合でてえなあ～」

「タイガはせつかくドリブルでいいもん持つてんだからもつとフェイクとか勉強しろよ。」

「それコハル先輩にも言われた。だから今DVDで学習中だよ。そ

れよりお前のポジションは大変だよな。」

「ソリノルはPF、レギュラー確定のジョー先輩と同じだ。

「やうなんだよねえ、この前なんか鬼バージョンのコハル先輩に「ジャンプバカ」って言われた。」

「ハハッ、当たつてる当たつてる」

「言つとくけどお前にはぜつてえ負けないかんな！」

「うわあいっせー！」

「いつまでもしゃべつとるんだ！」

「すいません！」

補習もまた鬼瓦先生だった。

それにしてミノルはいいやつだ。オレの身長が低いのをバカにしている部員も多い中、こうやって対等に接してくれる。いつか一緒に試合でプレーしてえな。

「王地、ボーッとしたるんじゃない！」

「すいません！」

## 捷に縛られる姫

「今から重大発表をします！」

突然レイから部員に向かつて言い放つた。

「これより部外恋愛禁止！」

一瞬みんなの思考が止まる。

「『めんレイなにそれ？』

「恋愛」という言葉に真っ先に反応したのはアカネだった。

「文字通りよ。これから恋愛はしてもいいけど相手はバスケ部に限るってこと。これは男バスのマネージャーの口ハルさんも了承済みだからね。」

やつぱ意味わかんねえ～。ふつう「部活『内』恋愛禁止」ならたまに聞くけど

「その『部活外恋愛禁止令』になんの意味があるのよ？」

「よくぞ聞いてくれました！これはバスケをしている者同士がお互いに刺激し合い、高め合つことを目的とするすんばらしい捷であるのです！えつへん。」

そう言って手を腰にあてて立るレイはどう見ても「前へならえ」の先頭の人には見えない。

「バスケをやっている人間としか恋愛をしてはいけない。他校相手でも認めるけどバスケの応援は禁物よ。ちなみにあたしはバスケ一

筋ですから。だからこれはみんなのための捷よ。」

「ちょ、ちょっと待つてよ、そんな急に言われても困るし。あたしだって女子高生だ。自由に恋愛くらいしてみたい。

「えへなになに、もしかして他の部活にもう好きな人いるの〜?」「別にそういうわけじゃないけど……」

あたしがなにか言いあぐねていると、

「へえ〜、おもしろそうな考え方ですね。」

早くもミスズはノリノリだ。もう少し疑問とか持とうよ。

「まあ男子部員はそこそこほしーのもいるし、アタシはかまわなければアカネだ。狙う気マンマンだな。いけど。」

「こんなのサアヤは反対よね?」  
最後の頼みの綱として聞いてみると、あつ、でも考えてみたらこの子恋愛とか興味なさそうだった。

「べ、別にアタシはそれならず、ぜんぜんかまわないけど」

あれっ?なんかいつもと違つて乙女チックな反応!  
「もしかしてすでにバスケ部に好きな人いるとか?」

あのクールなサアヤがなんだかもじもじしているー。  
「じ、実は付き合つてるの。」

「えへ〜!..だれだれ?」

「…イシちゃん先輩」

「え~~~~~！……！」

これには他の4人も驚きだった。

イシちゃん先輩はお世辞にもカッコいいとは言えない。下手したらぽっちゃり系だ。それが女バス内どころか、学年単位でも1、2を争うかわいさのサアヤが付き合つているといつのだからそりゃビックリするさ。

びつやうらのぽっちゃり加減がたまらないいそうだ。  
今日あたしは人は見かけによらないことを学んだ。

今日の練習後、「ハル先輩から「部活外恋愛禁止令」なるものが通告された。

ちなみに「ハル先輩は、

「私はシユースケ先輩一筋ですから問題ありません。もうフフられましたけどね！！」

なんか完全に私情が見え隠れしているのは気のせいかな？

そんなことよりみんなは我が事の方が大事らしく、そこから一気に勝手な「品定め」トークが始まる。

「ていうか何気に女バスってみんなレベル高いよな？」

「たしかに。オレはミスズちゃんがいいな。なにげに本物のお嬢様らしいだ。」

「お上品さが湧き出てるもんなあ。」

「レイちゃんもちつこくつてかわいらしいよな。」

「でもあの子バスケ一筋で彼氏作らない主義らしいぜ。」

「まじかよ～～」

お前ら本気で誰かと付き合つたりなのかな？

「でもオレはやっぱサアヤちゃんだよなあ

「うんうん」

大多数がサアヤちゃん派だった。

あとでコイツラは絶望を味わうことになるのだが…

「異議あり！」

そう声を立てたのはカズキだった。

「オレはアカネちゃん一筋だ。誰にもジャマさせねえ。あのギリギラした視線がたまらんぜ、ああ、お好きにござうが。」

「そういえば小泉も『テカいけど、そこそこかわいい』ってちやかわいいんだよな」

「おこ、やめとけ。あの子はとっくにタイガのもんらしげや」

「ちょっと待てやーーー！」

誰だそんなこと言つて出したのは。そんな根も葉もないウワサは断固断ち切らねば！

「でも逆凸凹コンビってなんかおもしろそうだよな。」

「おもしろいがどうかで人の這つた惚れたを決めんじゃねーー！」

かくしてこの指令は誰か縁のあるヤツはこるのかいないのか…

## 猛アタックを田撲する姫

「部活外恋愛禁止令」がでてから、アカネの行動が急変した。

練習後は必ず、

「リョウスケくん、はいタオル。しっかり汗ふいてね」

「サンキュー」

「リョウスケくん、これクッキー作ってきたの。よかつたら食べてね。」

「お、おひありがとひ。」

とまあこんな感じだつた。

完全にロックオンしたようだ。

極めつけはこれだ。

「リョウスケくん、これアナタのために一生懸命編んだの。受け取つてくれる?」

「いいよ、これ作るの時間がかかるだろ?いつもありがとう。」

「ううん、全然たいしたことないよ!それより受け取つてくれて嬉しいー!」

あたしはつい気になつて聞いてみた。

「最近完全にアカネお熱だよね。でもどうしてリョウスケくんなの?」

「だつてリョウスケくん。入部してからずっと活躍してるじゃん。同じシユーターとしては憧れて当然でしょ。あと何気にオシャレでかっこいいしゃー。」

最後の理由だけにやたらと気持ちがこもっていた気がするのは、気のせいだということにしておこう。

「決めた、今日リョウスケくんに告白するわー…」

「がんばってねアカネ！」

あの努力を見たら応援しないわけにはいかない。

練習中、アカネのショートはいつももまして良く入った。まさに愛の力はオソルベシ。

その日の練習後、

「リョウスケくん、後でちょっとといいかな？」

「え？ 別に少しなら構わないけど。」

「やつた ジャああたし先に体育館裏で待ってるから。」

そう言つとアカネは去つていき、リョウスケも体育館裏に消えていった。

サアヤちゃんがイシちゃん先輩とすでに付き合っていることを知ってしまった「彼女作りたい組」（元サアヤちゃん派）は他校の女子に試合でアピールするためだとで異様に練習に燃えている。これを知つてやつたのだとしたら、コハル先輩もなかなか策士だ。

7月に入つて体育館の気温も高くなり、自然とみんなの顔も赤くなつてゐる。

ところで最近やたらとリョウスケにまつてくるアカネちゃんが今日ついに動いたようだ。体育館裏に呼び出したらしい。

当然みんなはその結果を気になつて聞いてみる。

「おいリョウスケ、アカネちゃんとはどうなつたんだよ？」

「ふつた。」

「どうしてだよ、かわいいじゃんよ？」と周りが問い合わせる中、「オレ今バスケのことしか考えられないから。」だそうだ。なんというかコイツもストイックなやつだ。

でもオレもちょっと言つてみたいセリフではあつたりする。

ちなみにアカネちゃんのリョウスケへのもうアピール期間、長さにして一週間の間はカズキはインフルエンザで休んでいたので何も知らない。

「部活外恋愛禁止令」が出されてから初めて練習に参加したカズキは、練習後いきなり体育館の中で叫んだ。

「アカネちゃん好きですーつきあつてください。」

体育館にいる誰もが一瞬固まる。男どもの方はやつべえ、リョウスケのこと伝えてなかつた！とこつ焦りの気持ちも入っている。

本人の顔は真っ赤だ。これは暑さのせいではないだろう。なんだかこつちまで恥ずかしくなつてきたぜ。

「いいよー！」

その沈黙を破つたのは、アカネちゃんのこの一言だった。

その思いもよらない発言にまたしげらぐ体育館は固まつた。

もつすぐ夏休みがやつてくる頃だ。

## 夏なのに浮かれてない姫

公開告白があつたあとアカネは質問攻めだつた。

「ビックリ、あんたつい昨日までリョウスケくんラブだつたじゃないの。」

「カズキくんじゅ全然タイプ違つじゃん。」

「やっぱつフラれたあとで弱つてたから効いちゃつたとか？」

といふかこれらの質問事項はすべてアタシだ。ウチの部員は他人のそれには関心が薄いらしい。田頃はあんだけあたしとタイガのことばりくりいじつてくるクセに。なんか不公平だ。

「うーん、ていうかリョウスケくんダメだつたからカズキにしようと思つてたし、手間が省けたつて感じい？」

ここはとんでもない尻軽女だなオイ。せいぜいお幸せにどうぞ。

「さあすつきりしたとこで夏休みの予定のお知らせです！」

相次ぐ一組のカップルのことなんかどこ吹く風でレイが言い放つた。

夏休み期間の予定表が書かれているプリントが配られる。けつこう練習がびつしりだ。

これを見てアカネがぼやく。

「え～これじゃカズキとデートできないじゃん！」

「はいそこ、『部活外恋愛禁止令』の原則を忘れない！」

こんなときこそ、何も言わずにじょとじょびしそうな顔をするだけなのはサアヤ、りしこ。

まあヒマ人のあたしことつては予定詰まつてくれた方がありがたいんですがね。

「けつこう男バスとの練習時間被つてるんだね。」

「そりやアタシら5人しかないとせつかくコートがあつても練習できることが限られてくるからね。コハル先輩と話し合つてなんとか合わせてもらつたわ。」

「男子の練習に合わせる」となるからハードになるのは覚悟しておこよねー！」

「はいー。」

「ドモリの『お楽しみイベント』つてなつてる日はなんですか？」

「ちすがミスズ、よく氣づいてくれました。でも内容は秘密よ。」

けつぎよく教えてくれんのかい！

## スピノ王

夏休みに入つてすぐ紅白戦が行われた。  
日頃のレギュラーメンバーAチーム対残りのBチームという組み合  
わせである。

ちなみにウチの部員は11人。

その唯一のスタメン落ちがオレだつた。

「ディーフェンス、ディーフェンス！」  
一人声を出す。

むなしくて泣きそうだぜ。

得点は当然というか、Aチームの優勢であつた。

Bチームの監督として入つている鬼モードのコハル先輩の檄が飛ぶ。  
「スタメン入りしたかつたら死ぬ氣でやれや！」

「オラ、ジャンプバカ！ボール取つたらすぐに出せ。」  
「うつす！」  
「これはミノルだ。

後半から出場するようコハル先輩から指示があつた。

待つてました！

オレのマッチャップはカズキ。

「出てきたばつかで悪いが、愛のパワーで無敵なオレは抜けねえぞ  
？」

「そんなふざけたパワーには負けねえよ。」  
オレにボールが回ってきた。

ダムダムダム

クルツ

「なにっ？」

スピンドルだ。

前にサアヤちゃんにこれで抜かれまくったのが悔しくて何度もDVDを見て研究したし、何度も練習していた。

またボールが回ってきた。

もういいちょ。

クルツ

スツ

ちつ、ステイールされちまつた。

「2度目は通用しねえぜ！」

ちなみに今完成している技はこれだけ。その後は、得意のスピード任せのドリブルと織り交ぜてなんとか対抗した。

一方ディフェンス。カズキはスタメン勝ち取ってるだけあって多彩な攻撃で攻めてきて抜かれまくった。

「タイガあ、てめえディフェンスの方なんにも勉強してこなかつただろ！」

「すいません！」

まったくコハル先輩の言つ通りなのだつた。

## 意外と押しつに弱い姫

「これから本格的にセンターとして育てていくから覚悟しなきゃよね！」

レイはやつてあたしを指差したのは昨日のこと。

ただいまミスズちゃんとおしゃらまんじゅうの真っ最中である。

べ、別に練習中に遊んでるわけじゃないんだよ？これはスクリーンアウトと言つてリバウンドのポジション取りの際に重要ならしい。リバウンドの際ゴールに近ければそれだけ有利だからだ。

しかしへミスズちゃん、お上品な見た目からは想像もつかないほど『押し』が強いな。身長も体重もあたしの方が一回り上なはずなのに全然押しこめないよ。

「ヒメさん、もっと体制を低くしないと力が入りませんことよ。」「はいー。」

ちなみに残りの3人は今日は男子との合同練習中。

練習後、タイガがなんかこいつちにやつてきた。

「見ておもしろかつたぜ。」

「なにがよ？」

「デカいだけが取り柄のお前が、ミスズちゃんに力負けしてひいひい言つてることだよ。」

「なんですかええー！」

「でもよくがんばってたぜ。」

「え？」

「リバウンドは大事だからな。じゃないとおれ達シューートする側の人間は遠慮なく打てなくなるし。これからもがんばれよ！」

「え、ああ、うん。」

いつたいアイツはなにを言いたかったんだろう。そしてこの気持ちはいつたいなんなんだろ？

練習は連日容赦なく続いた。時間もかかる」とながら内容も十分に濃いバスケ生活を過ごしていた。

そしてようやく夏休み始まってから初めての休みの日、夏祭りをカズキに誘われた。

これでテンションアガらないワケがない。

だって「お祭り」ですよ、「お祭り」。いやほーい

バツチリ浴衣に着替えて待ち合わせ場所に行くとフツーの私服のカズキが待っていた。やっぱほりきりすきちやったのバレたかな？

「よつ」

「おひ、 やつぱ女子と待ち合わせすると絶対遅いんだよな～」

「あ、アカネちゃん呼んだのか。」

そりやそうだよな、念願の彼女とこんな日に一緒に行動しないわけがないよな。

「じゃあオレおじやまむしじゃね?」

「やじらへんばい心配なぐ～」

カズキはにやにやしてくる。なんだってんだよ。

しばらくしてアカネちゃんともう一人があらわれた。

髪を盛つているせいでいつも以上に高いその『全長』。

イヤな予感はしていたんだ。

あらわれたのは小泉ヒメだつた。

「なんだよオマエかよ~」

「それはこっちのセリフよ。バスケ部の誰かが来るつていうからでつくり自分より身長高い子来ると思って、せっかくはりきつて盛つてきたつていうのに」

「じゃあ早くそれ戻せよ。デカいのが目立つだろ。」

「相変わらず小さいわね。」

「どういう意味だよ?」

「2つの意味でよ。あつ、ついでおバカさんでもあるからわからぬいか。」

「んなこいつお~!」

「やつぱプリップロンビセー!~」

「だろ~やつぱ一緒に来てもらつて正解だつたぜ!」

できたてほやほやカツプルは人のケンカを見といて大爆笑である。なんかもうイロイロ回る前にイロイロ疲れた。

最初は4人でお店を回つていたのだがいつの間にか、というか当然の「ごとくカズキとアカネちゃんは一人でどこかに行つてしまつた。

となるといつも一人つきりである。

「しょうがない、たこ焼きでも食べよ~」

「「しょうがない」ってなんだよ。でもオレもむづむづしたこ焼き食べたかったし別にいいけど。」

その後は射的屋。

「あんたSFなんだからちやんと並んでなでこよ。」

「こんな時にバスケ関係ないだろー。」

「なんでよ、SFつていつたらショートとか入れてナンボのポジションでしょ？」

「オレはドリブル派なんだよー。」

「なにそれ意味分かんなーい。サアヤやカズキくんはなんでもこなせてるじゃない。」

「う、うむせえー。」

なんだか今日はやられっぱなしだ。

「今日はせーじー楽しかったわよつ」

「なんだよ「せーじー」って」

「また明日ね~」

「ああまた明日」

べ、別にまた遊ぶわけじゃないからな。部活でまた顔合わすだけだつつのー。

## 夏の暑さに負けなかつた姫

夏休みも残すといひあとわずか。

思い返せば暑苦しおしくらまんじゅうから始まり、きつつい練習の数々。

お盆も過ぎて少し体育館の中も涼しいとは言わないまでも、蒸し風呂状態から少し解放されつつある今日この頃。

一刻一刻とその日が迫ってきていた。

やつ、『お楽しみイベント』。

これだけを心の支えにして今まで夏休みの練習を頑張ってきたと言つても過言ではない。

ついにレイからソレについての発表があった。

「この夏の総仕上げに、練習試合を行いますー。」

そつちだつたか——！

てつきり娯楽系だと思って、浮かれちゃつたあたし。

これなら夏祭りの方がよっぽど楽しかったし……でも、べつにアレもそこまで楽しかったわけじゃないけどねー！

そんなわけで『お待ちかね』の練習試合スタート！

レイを起点として、サアヤとアカネが序盤からバンバンショートを決めてきた。

それでもたまに外すことがある。そんな時はあたしの出番だ。この夏マスターしたスクリーンアウトで相手の〇をゴール下の外側へ追いやる。そこをミスズががっちりトリバウンドを取ってくれるので、連續して攻撃が可能だった。

「今度はヒメさんにも見せ場を作つて差し上げますわね。」

ミスズにそう言われて間もなく、そのときがやつてきた。  
相手のシュー<sup>ト</sup>が外れた。

ミスズは自分のマーク相手を抑え込んでいる。ビーヴヤーリーはあたしが跳ばなきゃいけないみたいだ。

相手の指先があたしの手首の外側をかすつた。

取つた！

あたしがリバウンドを決めて、ボールを取つたのだ！

「ヒメー！」

すぐに声のした方に夢中でボールを投げた。

その声の主はレイだつた。あつという間に一人でコートを駆け抜け速攻を決めてしまった。

これつてアシストつていうのだろうか？初めて得点に絡めた気がして、まだ試合中なのに嬉しさがこみ上ってきた。

試合は69 - 51で勝つた。

みんなに褒められた。

夏の成果は出ていたみたい。

やつぱり勝つていいな。

夏休みの間「ハル先輩からずっとと言われてきたことなんだが、「今からティファーンスカのアップは期待してませんから、その代りもう一つドリブルテクニックを身に付けてくるように」と言われ、もつか家でDVD鑑賞中。

それにしても見るだけで疲れるんだよなー、これ。やっぱりバスケは見るもんじゃなくてプレーするもんだよな！

なんて思つているとカズキから電話がかかってきた。  
「今なにしてる？」

「バスケの勉強中だよ。言つとくけどこの前みたいに遊びの誘いなら残念だがお断りだぞ。オレは日々バスケのために生きてくことを決めたんだかんな。」

「それも大事だけども、オマエ夏休みの宿題つて終わつた？」

しまつた〜

「「」の間はさてはオマエやつてねえな？」

「おっしゃるとおりで「ござ」ます。」

「明日3・1日は練習休みだろ？それでそんな哀れな子羊どもを集めて勉強会でもしようと思つてさ。」

「カズキくんナイスラ...」

「じゃ明日10時に学校の待ち合せな

「おうー。」

次の日集まつたのはカズキとミノルとアキヒトだった。

「なんだよミノルお前もかよ。」

「あつたりめえよ、宿題は前日まで残すのが男つてもんだぜー!」「こいつはバカか。でも状況はオレも一緒にだから反論ができない。

4人で勉強をしていようと30分もすると、カズキとミノルは飽きたと言つてジュークを買つて出て行つてしまつた。

残されたオレもなんだか集中力が切れてしまつた。

今はアキヒトと2人っきりの状況。

カズキやミノルとは部活でもよくバカをやつていたりするが、アキヒトとはあまり話したことがなかつた。なので少し緊張していた。

「なあアキヒト、お前マジメそつだけどなんで宿題やつてなかつたんだ?」

「だつて毎日のように練習だつたじゃん?」

「オレが言えた義理じやないが、それは他の部員も一緒にじやないか?」

「オレ実は練習の反省ノートとか書いてるんだ。で、書いてるうちにいろいろチームの構想とか考えてるとあつとこう間に時間なくななるんだよね。」

「さすがPGだな。チーム全体のこと考えてるなんてすげえよー。やつてることがやつぱ違うなあ。」

「そんなことねえよ。オレはソーマさんに追いつきたくて毎日必死だよ。」

オレがただただ感心しているとカズキとミノルが戻ってきた。

「お、なんかおもしろいやつな話してんじゃん、聞かせてよ。」

そこからは4人でバスケ談義で大盛り上がりだった。

夏休み最後の日に楽しい思い出ができたのだが、けっきょくその日宿題が終わることはなかった。

## 人の恋に振りまわされた姫

夏も終わるとあつといつまに新人戦がやつてきた。

1回戦は森山高校とかいう無名高校。そこそこ伝統はあるらしいが、ウワサじゅ合コンに行つたり、とつかえひつかえカレシを作つたりして遊びまづけてるような、いわゆる弱小校だつた。

「みんないい、こんなキャラキャラした部と競つてるよ!」  
先なんて田舎せないからね!」

「はい!」

試合は一方的だつた。

そして今回の得点女王はなんといつてもサアヤだつた。その好調を見抜いたレイはサアヤにボールを集めだ。容赦なく切り込んでいく一人で何本も決めた。これには森山高校のメンバーもなすすべもなかつた。

試合は78-23で圧勝だつた。

相手が弱かつたこともあり、ベンチメンバーやいないあたし達にとって致命的なスタミナ不足は問題なく解決した。

「サアヤ、今日は絶好調じゃない!」

「じ、実はイシちゃんに今日がんばつたら『褒美してくれるので約束してたんだ。』

「え、なに、なにい？」

「キスしてくれるって…」

「ひゅ～おアツイ」つてー次の試合も頼むよー」

「うん！」

「うこう時のサアヤは顔がかわいいとかじやなく、仕草とか内面から出る乙女チックなところが女のあたしでもきゅんきゅんさせてしまつ。

2日後、2回戦が始まった。

序盤は24・36で劣勢だつた。すかさずレイがタイムアウトを取つた。

「ちょっと、サアヤ1回戦の勢にはびづいたつてこのよー・まるで動きがなつてないじやない！」

「…」めん。

「いつたい何があつたつていうの？」

「昨日イシちゃんとケンカしちゃつて…」

「その原因になによ？」

レイの追撃は止まらない。

「…イシちゃんのプリン食べちやつたの」

「はあ？」

「だつてあんまりにもおこしあだつたからつー…」

ああ、サアヤもなんだかんだでスイーツ好きの普通の女の子なんだな。つていうか今はそんなことに感心してる場合じやない！

「レイ、アタシのこと思い切りぶつて」

「それで気合い入るとでも言うの？」

「わからない。でも何かきっかけがないと、何も始まらない気がする。」

「わかった

バシツ、バシツ、バシツ

容赦ない往復ビンタが体育館に響き渡る。

「よし、これで5人全員気持ち入ったこと思うし、絶対勝つわよー！」

「はい！」

しかし1回戦の相手とは違つて実力派がそろつたチームだった。序盤のリードが効いたこと、徹底的に走らせたことで後半疲れが見えて51 - 70で負けた。

## 1. プレー王子

女子の試合はもう終わったようだつたが、シード権を獲得している男子はここからだつた。

まず緒戦はベスト8まで勝ちあがつてきた江戸川学園。

「相手の予想スタメンを発表します。PGの工藤174センチ、SG服部177センチ、SF高木185センチ、PF毛利188センチ、C田黒191センチです。PGを中心にして、とても統制のとれたバランスのいいチームだと言つていひです。」

「身長差に関しては五分といつたところか。」

「どっちが先にゴール下を制することができるかがカギだな。」

「じつちもいつも通り、PGソーマさん、SGリョースケくん、SFカズキくん、PFジョーさん、Cイシちゃんとで行きます。他のベンチメンバーも場合によつてはどんどん投入していくから覚悟しておいてくださいね！」

「うつす！」

試合は序盤から苦しい展開になつた。相手のPGである工藤がフリーになつた選手を見つけるのが上手く、ディフェンスにできた穴をうまく突かれて得点を許してしまつた。

点差は12 - 20まで広がつていた。

しかしここで黙つてないのが「ゴール下の一人だつた。ジョーさんはショートブロックに何度も飛び、ピンチを救つた。イシちゃんは簡単に「ゴール下へ入らせず、オフェンスでは見事にダンクを決めた。

「よーし、ここ止めて一気に逆転すつぞ！」

そのソーマさんの一言はウソではなかつた。さつきのお返しとばかりに、ディフェンスをかわしてフリーになつたリョウスケにパスをする。

シュバツ

お得意のショートが決まった。

次はカズキだつた。パスをもらつと中へ切り込んでいく。しかしここもベスト8。田黒と毛利がマークを付けてきた。この高さの差じや入らない。

誰もがそう思つた瞬間だつた。カズキは体を後ろに下げながらショートを放つた。

「ナイスだ、フェイダウェイショート…」

「ハル先輩も大興奮のプレーである。」

そこで波に乗りかけていた翔泉高校だつたが、次のプレーで一瞬戦意が奪われる。

服部が速攻からの3ptショート。

それでリズムを崩したのか、翔泉の攻撃では時間オーバーになってしまった。

「ここで翔泉がタイムアウトをとった。

「せっかく流れをつかみかけたのに、こんななんじゃ全然ダメだ！タイガを使う。」

このコハル先輩の言葉には他の部員だけでなく、オレ自身も驚いた。

「なんだ、タイガびびってんのか？」

「い、い、いやそんなことないですよー。」

「めっちゃ動搖してんじゃねえか。」

「つるせえカズキ、これは武者震いつてやつだよー。」

「なんか違う気もするけど、とにかくコハルの期待に応えてくれよなー。」

「うすー！キャプテンー！」

「つして公式戦デビューとなつた。」

「遠慮しなくていいからねー！ガンガンつこんでくのよー！」

「うすー！」

交代開始早々パスが回ってきた。マッチアップ相手はオレより20センチ近くも身長が高い。でもそんなの言い訳にならねえ。

だつてオレは<sup>スマートルフオワード</sup>SFTとしてやつてくつて決めたんだから。

クロスオーバーステップで相手を左右に振る。

相手が一瞬右方向に体重をかけた！

それを見逃さず左方向から一気に抜きすぐ。そのまま「ゴールへ一直線。

シュバツ

公式戦初ゴールだぜ！

その後はすぐに交代させられた。果たしてチームに貢献できるプレーができたかどうかは分からなかつた。ただし、あの抜き去つた瞬間とゴールが決まつた瞬間の感触は忘れることができなかつた。

そんなオレの活躍のおかげか（？）チームは70-65で勝利した。

そんな浮かれムードの部員とは対照的に

「こんなんじやダメだ。」

ソーマ先輩が言ったこの言葉の意味を、オレは後で知ることになる。

## 新しい道が見えた姫

「」の前の試合の反省会をしていた。

「あの試合、サアヤのこと抜きにしてもかなわなかつたのは事実だわ。このチームの弱点になにかわかる?」

アカネが迷わず言った。

「そりゃヒメでしょ。」

わかつちやいるけどそんなはつきり言わんでも…

「せうよ、でもその初心者のヒメが一番可能性が大きいのもまた事実よ。」

「そりなの?」

あたしはレイの意外な言葉に驚く。

「そうですわよ。だつて初心者のヒメさんにはまだまだ身に付けてもらいたい技術がたくさんあるんですもの。つまりヒメさんが強くなるつてことは、イコールこのチーム全体が強くなるつてこと同意なわけです。」

ミスズもそう言ってくれてるみたいだし、ホントになんだら。」「なのでこれからヒメには新しい技をマスターしてもらおうと思つているの。」

「それって具体的になんなの?」

「シユートよー。」

「え、でもシユートできる人ならサアヤとアカネを筆頭に、他の4人で十分じゃないの?」

「わかつてないわね。あなたにシユート力が全くないつて相手にバレてないうちはいいわよ。でもそれを見抜かれたら最後、あなたを

マークする価値がないと思われる。やつなるとどうなると想つ?」

「えっと、他の人へのマークがきつくなる?」

「その通りよ。今までの試合でも後半になつてサアヤにダブルチムをつけられたことは何度もあつたわ。あなたがショートを身に付けることで、それを打ち崩すことができるのよ!」

なんだか自分にもできる!』があると知つて嬉しくなつた。それと、ショートについては実はずつと憧れていたプレーでもあつたのだ。

「それじゃ早速今日からゴールトからのショート練習やるわよ!..」

「はい!」

「1日ノルマ300本!..」

ええええ~

次はいよいよ決勝トーナメントだ。

いいようのない緊張感がひしひしと伝わってくる。

なんたつて相手は夏にぎりぎりで勝ったとはいえ、優勝候補筆頭の猛将高校だからだ。

「センパイ達が抜けたからってこれで負けてたらシャレになんねえぞ。気合い入れていっぞ！」

「うつす！」

しかしその気合にはまったく通じなかつたことを知る。

前半だけで50得点を許し、ハーフタイムに入つた。そのときのスタメンは肉体的にも精神的にも相当疲労がたまつているようだつた。

「このまま引き下がるわけにはいかねえからな、タイガも準備しておくようこー！」

「はーー！」

後半途中から交代してコートに入った瞬間、明らかにこれまでの試合なんかとは空気が違つのが感じられた。

そしてベンチから見てある程度分かっていたはずなのに、それでも

相手選手のレベルの高さにのまれてしまった。

結果はダブルスコア、しかも100点とられての完敗だった。

その日の試合の後はいつもお調子者のソーマさんやカズキも何も言わず、ただコハル先輩の叱咤激励を受けていた。

続く残りの試合も猛将戦でのショックが大きかったのか、惨敗だった。

そして試合後にはさらにショックなことが続いた。

8人しかいない1年のうち、新人戦後3人がやめた。

## なんだかんだ言って、な姫

「文化祭楽しみだよね」

「そうだな。」

「なんてこいつかいつもの学級委員の仕事も全然苦じやないっていつ

かあ～」

「そうだな。」

「もう企画都えてるだけでウキウキになれるやうなんだよね

「そうだな。」

「…タイガつてチビだよね。」

「そうだな。」

「これはアレだ。こいつそやのお返し」と

ピンク

「イッタ、なにすんだよてめえ！」

「くらつてるのに分からなかつた? デコピンよ。そ・れ・に、なに  
してんだよはこいつのセリフよー! こっちがなに言つても「そうだな。  
」の通り一遍等な返事しかしないくせにー。」

「だからつけてコピンするこたあねえだろー! オマエのムダにデかい  
手だから破壊力ありすぎだつづのー。」

「またそうやって人のコンプレックスに触れるとか、ホントデリカ  
シーないわね。」

「さつきおまえもチビとか言つてたじゃねえかよ。」

「セヒだけはちゃんと聞いてたのね。だったらちやんと返事しなさ  
いよ。まあそこだけ反応するつてのもどうかと想つたけど。」

とにかく、文化祭の企画案まとめりやこましょ。」

「…ああ。」

「はあ、今日はなんかもうあんたダメね。」

「ダメってなんだよー。」

「そのままの意味よ。…この前の試合でなんか壁にでもぶつかったの?」

「べ、別におまえに関係ないだろー。このおせつかい女ー。」

わかりやすっ。でも、これもいつぞやの借りもあるし聞いてやるか。

「そんなこと言わずに話してみたら? 初心者のあたしに具体的なアドバイスなんてできるはずもないけど、聞いてあげることくらいはできるわよ?」

「うへ~」

悩んでる歯ごたえる

「…全然届かなかつた。」

「やっぱ身長のこと?」

「自分が小さい」とくらいいやつてほどわかつてらあ! …ただ技術でもあれだけ一方的にやられたのがショックだつたつていうか。あんなにも常識離れた動きができる人間がいるんだつて、実際コートに立つてみて初めて肌で感じたら、急に口づくなつたんだ。」「いつも強気なんだでもそんなことがあるのね。」

「決勝トーナメントの相手はドコも今までの相手とは別次元みたいだつた。3年生のセンパイ達が優勝してたから、心のどこかでもつ

と簡単なものだと思つてたのかもしれない。」

「…それに仲間があれから3人も辞めちまつた。」

「それでタイガ自身も続けようかどうか悩んでる?」

「それない!オレは何があつたってバスケは続けていきたい。いや続ける…」

「じゃあやることは一つじゃない?」

「ああ分かつてるよ。練習して、練習して、それでも遠くても練習し抜いてやる!」

「そうそう、その意氣その意氣 やつとタイガりじくなつてきただじやない」

「えへへ、そうかな。」

「そうよ、タイガから強氣と元氣をとつたら何ものいらなんだから。

「たしかに、今日のことはやつこりとひしこりやるよ。 あ

りがとなヒメ。」

「きゅ、急になに言いく出すのよーべ、別にあたしはこのままだといつまでたつても学級委員の仕事が終わらないしい、あたしだつてバスケの練習早くしたいもん。」

「はいはいわかつてるよ。それじゃちやつちやつと終わらせますか。

「うん。」

その後は文化祭の話が予想以上に盛りあがりすぎてしまい。7時過ぎまでかかつた。タイガは「ハル先輩に、あたしもレイにたつぱりしほられたけど、たまにはこういつのもいいか。

あの悪夢のような新人戦から一週間後、初めて部活でミーティングが開かれた。ちなみにここに残っている一年はオレとリョウスケ、カズキ、ミノル、そしてアキヒト。

そのメンバーを前にして、唐突にコハル先輩が言い放った。

「カズキくんをセンターへコンバートします！」

なんじゃそりや！？本人も聞かされてなかつたらしく、口をあんぐりさせている。

「幸い身長も伸びて190センチ越えしてくれたみたいだし、カズキくんのセンスならこれから鍛えていけば十分に通用します。それにより、今までのフォワード力を合わせ持ったセンター、つまりCFが誕生するのです！」

「だからこの前身長測られたのか」

カズキが今度はつぶやいている。

「1年後には晴れてセンターになってから覚悟しておいてよね！」

「え、でもそれじゃ今からじゃ夏の大会に間に合わないじゃないですか。大体Cにはイシちゃん先輩がいるじゃないですか。」

ここでソーマ先輩が話出した。

「コハルとおれ達2年の3人で話してたんだ。この大会に挑んでみて、オレらの代じゃ優勝は無理だろ？って」

「そんなっ」

「だから次の代、お前たちにバトンを託すからそのための準備だと

思ってくれ。幸い残ってくれたメンバーはこれから中心になつて活躍してほしいと思っていたヤツらばかりだかんな。カズキだけじゃなく他のメンバーもそれを意識しながら練習に臨むようこ。  
「

「はい」、とこう返事を誰もすぐにはできなかつた。

その緊迫を破るよう、コハル先輩が言つた。

「それとタイガくん。このチーム状況だとこれからアナタは今まで以上に重要な役目になつてきます。なので今日から『シューート力向上特訓』を開始します！」

## いたせつづくせつ姫

「ヒメいい、しつかり見とくのよ。」

ショパン

「うんきれい。」

「当たり前じゃボケ！アタシがバスケ何年やってると思つてんのよ。はいアンタもやってみる。」

「はい。」

今こつして全体の練習後、レイと2人でショート練習に励んでいる。

ガスツ

「だあ～なんにもなつてない！　まず手がチガウ！　左手は添えるだけ！」

「レイこわいよお～。」

「うだうだ文句言わない！」

「は～い。え～っと左手は添えるだけと。」

ガスツ

「うん、今のは外したけどフォームは良かったわよ。その調子その

調子。」

「やつた」

「はいそれくらいで喜ばない！もう一球いくよ。」

ガスツ

うへへうまくいかない

シユパツ

あれつ、あたしもレイも打つてないはずなのにボールが跳んできたぞ??

後ろを振り向くとアカネの姿が。

「「めんあまりに下手だから冷やかしに来た」

「「冷やかしに来た」じゃないわよ、あんたはさつと帰つて力ズキくんといちゃいちゃでもしてなさいよ!」

「だつてカズキこの前の試合で負けたの相当悔しいじへくて、全然相手してくんないだもん。」

へこんでたのはあのバカだけじゃなかつたんだ。

「じゃなくて、人のジャマしてんじゃないわよ! レイからもなんか言つてやつて!」

「ちょうど良かつたわ、アカネがお手本見せてちょうつだい。ウチじやアンタが一番シコートフォームきれいだしね。」

「えつ、ちょっと待つてアタシはただ冷やかしに来ただけであつて

…

「やつてくれるわ・よ・ね?」

「…はい。」

そう、この部ではキャプテン命令は絶対なのだ。レイが言い出した

わけではないがいつの間にかそれが当たり前になつている。

「目線はそらさない！」

「ボールの握り方がチガウ！」

『監督』が2人になつた結果、ツッコミ（指導）も2倍になるのであつた。

ダムダムダムダムダム

キュッ

シユバツ

「ハル先輩から言われたシユート練習についてはドリブルでつっこんでそこからのジャンプショート。いわゆるストップ＆ジャンプの習得だった。

身長の低いオレが、わずかなチャンスの時間にシユートを決めるためには必須の技だ。でもなかなかうまくいかないんだよな。今のはたまたま入ったけど、まだほとんど外れることが多いし。って一人ぐちっててもしょうがないってわかつてんんだけどなあ。

ダムダムダムダムダムダム

そんな考え方をしながら氣づくと、延々とドリブルを続けてしまっていた。

「さつきからダムダムうるさいわね

隣で練習していたのは女バスの巨神兵、ヒメ。

「はあ？バスケはドリブルしてナンボだる。それよりおまえのその地味なゴール下シユートの練習の方が見てて恥ずかしくなるぜ。」

「くあ～むかつくー人が初心者なの知つて平氣でやつこい」と言  
う。」「

「おまえが先にケンカ売つてきたんだろ。…それとシユートすると  
きもつと膝曲げたほうがいいぞ。」

「えつ？」

「さつきから見ると手だけで打つてんだよ。だからフォームが安  
定しないし全然入んないんだよ。」

「わ、わかつてるわよそんなこと。今から直そうと思つてたど！」  
「ふふつ。なんだよそのママに怒られたときの小学生みたいな答え。

「うるさいわね。教えるなら優しく教えなさいよ。」

「悪いけどオレも自分の練習で忙しいの。それにアドバイスできる  
のはそれくらいだよ。見たところ他の細かいところはチームメイト  
にアドバイスちゃんともらつてるみたいだしな。あとは打つて打つ  
て打ちまくって、その感覚を身に付けるしかないんだよ。」

「そ、そつな？わかつた、やってみる。」

最後のセリフはヒメに言つてゐるようぢいで、自分自身にも言い聞  
かせているみたいだつた。

ダムダムダムダム

キュッ

ガスツ

あつ外した。  
精進精進。

## 召使にて祭り上げられた姫

「はいそれじゃ 文化祭の企画になにか提案ある人？」

この前タイガと話しても結局アイディアはなしつとも湧いてこなかつた。

こうなつたらクラスのみんなに頼るひきやない！そんなわけでクラスの前に立つてこうして仕切つてているわけである。

すると誰かが言い出した。

「ていうかそれ、学級委員が原案出してくるつて話じゃなかたつけ？」

「それはその……」

あたしがはつべきつ言えずにしてみると、タイガが助け舟（？）を出してきてくれた。

「い、イロイロあつたんだよつ！」

「そ、そうよ学級委員だつて他の仕事で忙しいのー。」

「あらあら怪しげですね～』『ブリブリコンビ』？」

ゲンキくんうぜえ～

「ホントホント、お2人でナニをしていらっしゃったのかしらあ？」「くつそおレイめ、この前部活遅刻した腹いせか？訳知り顔な雰囲気出しだ、もうつ！」

「バカ言つてんじやねえよ！なんでこんなのと2人でいて樂しいワケないだろ！」

「な、なによそれーまるであたしがつまんない女みたいじやない！」

「だからわうこうややこしここと言つから誤解が広まるんだよ、考

えろよひ

「それとこれとは別問題よー。わつきの訂正しなさこよー。」

「だあ～～めんどくせえ、これだから女はあ」

「アツ、ひらめいたつー。」

「急になによレイ?」

「2人で漫才しなよー。」

「はあ?」「え?」

「いいじゃん!いいじゃん!もつりん『コンビ』は『プリプリコンビ』  
で」

「ゲンキー当たり前みたいにその名前使つてるけどオレアゼんつぜ  
ん認めてねえからな!」

「そ、そうよ、あたしだつて願い下げだわ。」

「おもしろや~」「アタシも見てみたい。」「その調子でやれえ、  
プリプリコンビー。」

あたし達当人の気持ちとは裏腹に、次第に盛り上がりいくクラス。

「そんなこと言われてもなにしゃべつたらいいかとか分かんないよ。」

「そんなのいつも感じでいいからさ、大まかな原稿はわたくしレ  
イとゲンキくんこと『召使いコンビ』にまつかせなさい!」

「いいねレイレイ、それいただき。ありがとうございます姫君、われわれ『四使いコンビ』にすべてお任せあれっ」

「よし、決まりだな。」

そして最後にドヤ顔でシメをつけます。咲

「うひーーーんーーー。」

この前のホームルームであれよあれよとこう間に決まった『プリップリコンビ』の漫才。しょーじき納得いかないことだらけだけれども、もう決まつたんだからやるしかなかつしょ。

でもその前にぼやくだけぼやかさせてくれ。

『漫才』の雰囲気作りとか言って、教室の中はまるでおどぞの國の中のお城風アレンジ。加えてクラス中メイドやら執事の衣装揃えてるけど、オマエラ絶対ソレ着たかつただけだろーまあこんなことは文化祭じやよくある話しらしげが。

ちなみにレイちゃんはメイド長設定らしく、一人だけフリフリつきのカチューシャをつけている。こや正直似合つててかわいいけども！

…ゲンキはまああれだ、アイツの服もこだわりあるらしいが勝手にやってくれって感じ。

それにしてなんだよオレのこの衣装。

いかにも『王子様』つて感じの、今にもベルサイユ宮殿のパーティにでも行けそななくらいの本格感！たしかに衣装係のみんなの努力は嬉しいけれども！ただ着てるコツチはメチャメチャばずかしいんですけど！

そして『お姫様』とのこの対面。

え、え～っと、馬子にも衣装とまじのことだな。

「な、なによ。人のことじりじり見てイヤラシイ。」

「ば、ばか！一瞬誰か分からなくなるくらい、あんまりにも豪華な衣装の方に驚いてたんだよ！」

「うわ、サイテー。いうことは真っ先に「とってもかわいいね」とか「キミに似合つてキレイだよ」とかの一言でもこいつてみなさいよ。」

「そんな気持ちわざご」と言えるかよ。」

「あら」「めんあそばせ。あなたのような卑しい心の持ち主には似合わぬ言葉でしたわね。オーホツホツホツ。」

コイツすっかり『女王様』気分になつてやがる。

「はいはいそうこう取りは本番までとつとおこしねえへ

そつ、もつすぐ公演の第一回目を迎える。

ヒメヒツ人舞台で行きスタンバイをする。

(呪使いコンビ特製の)日本は擦り切れるほど読んだ。

これまでの練習のおかげで、コイツとの間もむかつくへりこむへりだ。

あとは落ち着くだけ。

えつと「人」という字を口に書いて手でつまむ。

あれつなんか違つ氣がする。

「くすつ。」

「ちょ、お前なに笑つてんだよ」

「あんたが謎のおまじないをしてるからでしょ。フツー「人」の字を手のひらに書いて飲み込むでしょ。」

「うるせえ、ほっとけ！」

「でも安心した。」

「何がだよ？」

「あんたでも緊張するつて！」

「わ、わりいかよ。」

「べつにい。」

「バスケの試合に比べたらこなんなんへでもないね！」

「もうだいじょぶみたいね。じゃ、いくわよ」

「おう！」

ブーーー

それでは只今より、とある国の『お姫様<sup>プリンセス</sup>』と『王子様<sup>プリンス</sup>』、通称『プリプリコンビ』による漫才を始めたいと思います。

## メイド服と食べ歩き姫

あたし達の高校の文化祭、翔泉祭は2日間行われる。

1日目は2時間ごとに『漫才披露』があつたのでとても他を回る余裕もなく、休憩時間もひたすらタイガと一緒にレイヒゲンキンくんのダメだしきくらつて終わつた。

でも2日目は午前中一回公演ただけで、あとは自由時間になつていたのでレイヒゲンキンくんお店めぐりをすることにした。

「おなかすいたね、ドコ行こうか。」

「サアヤんとことかビーフたこ焼き屋やつてるみたいよ。」

「よし、んじゅソロできまrieri!」

行つてみると大行列だつた。しかしあつとこつ間にその行列も減つていき、あたし達の番が回つてしまつた。

「あれ、サアヤ受付じゃないんだね。キレイだから絶対そうだと思つたの!」

「あのミス無愛想にそれはムリっしょ?」

「ふふつ、それもそつかあ。ビニにいるんだろ? ね。見当たらぬなあ。」

「あ。サアヤだ。」

サアヤはお密せんに見えるといひで一生懸命たこ焼きを焼いている。

クルツ クルツ クルツ クルツ

それにして手際のいい手わざだ。生地をサードとまき、そこにタコ、天かすを放り込む。そして得意(?)のひっくり返し。一連の流れが美しくさえある。

「あれ、他にも見たことある顔がいるぞ」

「え、だれだれ?」

隣で同じようにたこ焼きをつづついているのはリョウスケくんだ。

クルツ クルツ クルツ クルツ

リョウスケくんもサアヤと同じくらい器用に回している。手首の柔かさはさすが名シユーターだ。

「ちょっとサアヤちゃん、リョウスケくん作りすぎだよ。パックに包むこっちの身にもなってよね。」

そのあまりの生産量に受け渡しの係りの子が悲鳴を上げている。

だがしかしじつはも返事がなく、黙々とたこ焼きを量産している。

意外とリョウスケくんも負けず嫌い?

あたし達もその消費に貢献すべくたこ焼きを購入し、話しかけることなくお店を後にした。

「なんか暑くなってきたね。」「

「じゃあなんか涼しいものでもかっこりますかー。」

「こいつはしゃこひひひひしゃーー。」

ちゅうひびタイミングよべ、なにやら威勢のいい声が聞こえてきた。

「お、ヒメおやんヒレイちやんじやないか。どうよ一杯かき氷でも。」

「お、わかつてぬ。今ちゅうひビ食べたいと思つてたといふなんだ。」

「だれお、うちのアキヒトすげえんだぜ、今日は絶対アツくなるからかき氷がガンガンに売れるって予想したらこの通りズバリよー。」「ちなみに配役考えたのも彼だつたりする?。」

「え、そつだけど?。」

天才的な。

「こらつしゃいませえ。」

受け付けにはまたまた見知った顔。

「あ、ミスズだ。」

いつも見ている顔のハズなのにこの暑さの中なんだか妙に癒されるわあ。男子だったら余計にそうだろうな。だってみんなかき氷なのにムリして一人で2つも3つも買つてゐるんだもの。ぜつたい後でおか壊すよ?。

ウチのレイといい、ルウつてのはホントに頭のいいとこうか人を活

かすのがつまじよな。

「よし、最後のシメはあれよね。」

「やうあれあれー漫才中もこれをずっと楽しみにしてたんだから

」

なにいってや、クレープですよ、クレープ。

え、食べ過ぎ?

いやいや女子にとってスイーツは別腹なのだ。

カズキくんが生地を器用に広げて、それを受け取ったアカネがトッピングをする。抜群の「ハビネーション」である。

素早く出来上がったクレープはアツアツだった。  
イロイロ♪」とそうまでした。

翔泉祭は実は3回田がある。それは後夜祭ともいって、有志の生徒だけが体育館に集まり、前日までの疲れを吹き飛ばすかのように文字通り『お祭り騒ぎ』をするのである。

お菓子やジュースが置かれ、自由に飲み食いできちよつとした立食パーティー状態。まあそんなお上品な雰囲気では決してないが、とにかく盛り上がっていて楽しい。

皆さん、静粛に願います。

急にアナウンスが入った。

それではただいまより、クラス別企画の優秀賞を発表したいと思います。

それでは早速第3位。2・7『アツキーナの焼きとりーな』！

あ、ソーマさんのクラスだ。あそこの担任のアツキーナ先生かわいいもんな。あつこれは関係ないか。でもたしかにあの焼き鳥はおいしかったもんな。

続いて第2位は3・8『笠崎さんちの笛団子、佐々木先生をわいどづか』

なんだか「さ」がやたら多い名前だな。でも2位とつてるんだから味は本物なんだろうな。

そして栄えある第1位は

会場がいつたん静まり返る。

1 - 5『波乗りかき氷』です！

すげえ、2・3年生を抑えての堂々の1位だった。

最後に特別賞の発表にまいります。

あれ、まだ賞が残つてたのか。でも正直そろそろ飽きてきたな。

1 - 2『プリプリコンビの優雅なお漫才』です！

え、まじで？

「やつたじゃんオージ、特別賞だつてえ…やつぱりプリプリコンビ  
は最強だなー！」

ゲンキは自分もかなり裏方としてがんばってくれたのにもかかわらず、オレとヒメだけの力でとつたみたいな喜び方をしている。正直照れくさい反面、やつぱり嬉しくもあつた。

放課後の部活で、1位をとつたミノルやアキヒトよりもオレの方が騒がれてたときは、初めてプリプリコンビやっててよかつたなって思つた瞬間だった。いや別に喜んで組んでるつもりはまったくないけどね。

あつ、でもこれでそろそろプリプリコンビも解散したいな。

## 人の恋バナ&じやない姫

翔泉祭が終わってすぐの放課後、部活前の更衣室はまだまだ翔泉祭のことでの盛り上がりがつづいていた。

そんな中、

「重要なお知らせがありますの。」

ミスズから珍しく、そう告げられた。  
みんなこれには話を止めて注目である。

「わたくし殿方ができました。」

殿方？ 殿 オトコ 彼氏

「ええ～～～

これは詳しく事情聴取せねば！

「相手は誰なの？」

「もちろんバスケット部の方ですわ。」

「うちの男バスの誰か？」

「いえ、他校の方です。」

「どうやって知り合ったの？」

「新人戦の時にお見かけしていてプレーしているお姿がステキな方だなと思ってたら、今日の翔泉祭に来ていらしたの。そして昨日、お付き合いしてほしいと言われましたの。」

ひゅ～。両思いだってわけかい。

「はい、驚くのはそこまで！今日は男子と試合するよー。」

そんな殺生な！　まだまだ聞きたいことがあるつてこいつの！」

「え、それって2年生も入ってるの？」

「そうよ、あっちもオールメンバーで参加してもいいわ。」

「それだとかなりキツくない？」

「正直それは否めないのよね。そのため今日は混合チームでやる」とになつてるから！』

(本日2度目の) 「ええ～～」

チーム分けはAチームが男バス2年のソーマさん、ジョーさん、イシちゃんの3人とアカネとサアヤだ。そして残りがBチーム。

Bチームのリーダーは自然とレイといふことになつていた。

「いい、相手のインサイドはかなり強力よ。幸いこつちは人数も多いし体力気にせずガンガンぶつかつていきなさいよね。」

「はい！」「うつす！」

こつちのスタメンはレイ、リョウスケくん、カズキくん、ミスズにあたしだった。

正直言つてこの組み合わせはかなりきつかった。特にアタシのところ。センター対決を言い渡されたのはいいけど、相手は男子の中でも超重量級のイシちゃん。

まずはBチームからの攻撃。

レイからパスを受け取つたリョウスケくんが3ptを放つも惜しくも外れる。

よし、こりはリバウンド。あたしの出番だ！

しかしイシちゃんはびくともしない。だつて90キロだよ~90キローあたしとこくつ違つと思つて!

まあ、あたしの体重がバレるから具体的な数字は言わないけれども。

当然のよつこイシちゃんにリバウンドを取られ、ターンオーバー攻守交代。

ソーマさんのフリーの選手を見つけて出すパスは脅威だ。

あつといつ間にサアヤにボールが渡り、ショート態勢に入った。

今度はサアヤのショートがリングに嫌われ落ちてくる。

もしかしてまたあ?

よし、今度は負けないと踏ん張つてみたものの、焼け石に水だ。イシちゃんにスクリーンアウトをかけられてビクともしない。

すると横からわざとジャンプしボールをかすめとつた人物がいた。

カズキくんだった。そういうえばカズキくんてSFのはずだけじ身長も190くらいあるし、リバウンドもこなせるんだな。プレーの幅が多くてすごいな。誰かさんに爪の垢でも飲ませてやりたいな。

「ヒメちゃんやるねえ、ぼく今の自由に動けなかつたよお。」

「あ、ありがとうございます。」

やつたイシちゃんにほめられちやつた。

「ヒメ、今度当たり負けたりまつたおすわよ~。」

レイさん、それはムチャつてもんですぜ。

けつぎょく、レイが試合中ずっと走り回って相手をかき乱してくれたことと、カズキくんのインサイドでのフォローもあり、スコアは14-20となんとかくらいついていた。

またスタメン落ちかよ、つべづべ縁がないな。

ちなみにコハル先輩はBチームの監督として指揮や交代の指示を出しているが、女子も混ざつてこむためか、髪は縛らず『通常バージョン』のようだ。

ようやく前半カズキと交代で出番が回ってきた。

レイちゃんからボールが回ってくるとすかさずドリブルで切り込む。

サアヤちゃんを抜いた。よっしゃ！

しかしヘルプですぐにイシちゃんが前に現れた。

そのときだった。

フリーでつたてるヤツがいる。  
そこにパスを出す。

シュバッ

「ナイス、ヒメ！特訓の成果出てんだじゃん！」  
「てへっ」

「あ、これがウワサのプリプリコンビですか、バスケのコンビネーションも絶好調でありますな。」

「つるせえミノル！」

ただ今回に関しては悪い気はしなかった。

ここで大幅にメンバーチェンジし、アキヒト、リョウスケ、オレ、ミノル、カズキの、純粋な男バス1年メンバーになった。

これから翔泉男バス部を担っていく上で、これが重要なマッチアップであることは十分にわかつていた。

ソーマさんからのボールだ。オレは未だに、この人のパスを出す方向が全く読めない。これで県のベスト3にはかなわないというのだから、相手高校のレベルの底が知れない。

ソーマさんがちらりとサアヤちゃんの方を向いた。すかさずオレはしっかりマークにつく。

しかしボールがやってこない。

やられた、アカネちゃんの手にボールがある。気づくとすぐにシューート態勢に入った。

しかしリョウスケが反応していたようだ。ボールに指先だけがかろううじて当たる。

ガスッ

「リバウンド！」

「ゴール下で8本の手がひしめき合ひ。」

そこから抜け出したのは、なんとミノルだった。

「よーし、じつから一本とつていこうか。」

「バカ、ミノルそれはフツーピングのアキヒトのセリフだろ?」

「いいよ、ミノルの方が気合いが入るからな。でもボールは返してくれ。」

アキヒトはコート全体を目線だけで素早く状況把握する。

そして見つけた。パスを通すための穴。

アキヒトのパスコースはカンペキだった。カズキもそれをしつかり受け取つてシュートを打とうとする。

しかしイシちゃんの壁は崩せず、力負けして仰向けに転ぶ羽田になつたのであった。

リョウスケやオレも積極的にシュートを狙つていいくのだったが、その度にジョー先輩のシュートブロックで防がれてしまった。

その後は一方的な試合展開が続き、終わつてみれば50 - 72という大差で負けた。

## 聖なる夜の予定を勝手に決められた姫

今年もある季節がやつてくれる。

街中にイルミネーションが咲き乱れ、カップルが増殖しだす。そしてもう、あたしのところにはサンタはやってこない、ただ苦痛なだけのイベント。

そうクリスマス。

この前のミスズに彼氏発覚で、いよいよ部活内の一人身はあたしとレイだけになってしまった。

かと言つて今さら誰か一緒に過ごしてくれる男の子が都合よく見つかるはずもなく。  
だいたい高校生にもなつて家族で仲良くクリスマスパーティーつてのも、なんだか恥ずかしいし。  
そうなると頼れるのは一人。

「レイ～、あんたクリスマスどうするの～？」  
「実はもう予定入ってるんだよね～」

え、ちょっと待つてレイまで？ あたしはどうすりやいいの～？

「そ、そ、それって相手誰なのよ？」

「もう何度もゲンキくんに誘われちゃつててさ、一緒にクリスマス会することにしたんだ。」「ちょっと、『部活外恋愛禁止』じゃなかつたの？」

「なによ、大げさな。ただの『クリスマス会』だつて言つてんじよ。それにタイガくんとヒメの参加もすでに決定事項だからね。4人で楽しく過ごしましょ」

やつた!と、内心ガツツポーズをとるのとは裏腹にここは悟られないようにならないとな。何となくその方がいいと、あたしのカンがそういう言つている。

「うんそれは別にかまわないけど……」

「でもま、アンタとタイガくんが『イイ感じ』になる分にはこいつこくまわないけどね~」

「それはずうえつつたいにありえなーーい!」

「あつ、プレゼント交換あるからちゃんと用意してよね。」

「え、それは一緒に買いに行つてくれないの?」

「それじゃ楽しみが半減しちゃうでしょ?」

「まあそっかあ」

「あと、包み紙の大きさが『手のひらサイズ』が条件らしいわよ?」

「うんわかった、がんばつてみる!」

こうして今年は別の意味で悩めるクリスマスになつそうだ。

この間にやがて『奴使いコンビ』の間で決まっていた4人の『クリスマス会』。

やばい、待ち合わせ時間の30分以上も前に来てしまった。これではめちゃくちゃ張り切つてるみたいデハナイカ。

集まってきたのは私服で着飾った女子2人（プラス野郎が1人）。レイちゃんはサンタのコスプレだ。ヤバいかわいすぎる！ヒメはさすがにコスプレではないが、でも普段の制服や部活姿とは違う雰囲気で調子狂うな。

いつも話しているようなメンバーなのに、いつもとはなんだか違う気持ち。あれこれってもしかして合コンとかいうやつ？って見当違いな勘違いをしてしまつほど、意識すればするほどなんだか緊張していく。

パーティーはレイちゃんの家で開かれた。レイちゃんのお母さんお手製のチキンはめちゃめちゃ上手かった。

もちろん手作りのロールケーキも用意してくれていた。わざわざサントの砂糖漬けまでのつけてくれてる。これで会費はタダっていうのは申し訳ないな。

その後にはゲンキのアホ企画が待っていた。と言つてもトランプの大富豪で大貧民になつたらモノマネ披露といつありきたりなものだつたが、これがけつこうおもしろかった。

「じゃあ最後にプレゼント交換しようぜーーー！」

酒も飲んでないのにゲンキのテンションはここも増して高い。

「全員皿をつぶって、プレゼントを手渡しで交換し合ってください」

」

なんだか今日一番のドキドキだ。

「ストップー わたる中身を開いて 」

中身を見た瞬間、オレは思わずつぶやいてしまった。

「かっけえ。」

オレンジ色のリストバンドだった。

おんなじようにすぐさま「かわいい」という声を上げた人がいた。

ヒメだった。手にはピンク色のリストバンドが握られている。

あ、オレが選んだヤシだ。

「おおー！ オージとヒメちゃんの、おやじじゃん！ レイちゃんどうちかあげた？」

「いやあ、アタシもさすがにクリスマスプレゼントでもバスケのことは考えてなかつたなあ」

「ということは『両想い』つてことですねなあ」

ゲンキのにやにやがいつにも増してうぜえ～

「うぬせえ、オシャレでも全然イケルと思つて買つたんだよ。わり

「かよ。」

「や、やつよ」こんなただの偶然だわ。」

しかしひんきとレイかやさんのことさせまい。

「オレはちゅうど新しいリストバンド欲しいって思つてたんだよね。  
ありがとせん。」

「こつちこや、なんかこうのわざわざ血分で貰つほびどもない  
とか思つてたし、ホント助かったわ、ゲンキくん、レイ、クリス  
マス会開いてくれてありがとう。」

「まあやつこいつにしておきますか。」

「やうですね、『メイド長』。それにしてもオレンジオージの『オ  
ジオジ』と、ピンクだから『ペーチヒメ』か。なかなかいい感じジ  
ヤン。」

「ひして聖なる夜に愛ではなく、また2つ、余計なあだ名が生まれ  
たのであった。」

## リバウンド地獄の姫

クリスマスの浮かれムードも24日でキレイに終わり、翌日からはまたバスケ漬けの日々が始まろうとしていた。

「やつぱりメのリバウンドはダメね。」

その一言が、この冬合宿のレイからの第一声だった。

全体練習が終わった後はひたすらリバウンドの練習だった。なんとあのイシちゃんからもいろいろ教わった。マッチアップした時はただ力任せのパワープレーヤーだと思ってたけど、実際教えてもらつたらスクリーンアウトのときの体の入れ方や、ジャンプのタイミングなど、多くのことを学ばせてもらつた。

しかしゴール下ってのはハードだ。男女のPFとC組がそろつて、ゴール下シートからの流れでリバウンドの練習をするのだが、なにせ当たりがめちゃめちゃ激しい。あたしはミスズとペアになつて、イシちゃん、ジョーさん、カズくん、ミノルくんと張り合つことになるのだが、それでも吹っ飛ばされることなんてざらだ。

生傷の絶えない日々が続いた。

正直くじけそうになつたこともあつた。

しかしカズくんはあたしの何倍も激しくじかれていた。あんなにフォワードとしては活躍しているのにそれでも足りないものはあるみたいだ。それだけ、ポジションが変わることなどは大変なん

だと思った。

ミズズだってあたしより一回り小さいし、男子相手だとそれ以上に体格差があるので全然気持ちで負けていない。

「わたくしこう見えて負けず嫌いですの。」

その言葉のとおり、練習では一歩もひかず何度もぶつかっていた。

なによりジローさんに言われた言葉があたしの中では響いていた。「いろいろ名ショーターでも半分ははずす。それを最後にリングに押しこめるか、逆に阻止できるか、それを握っているのがリバウンド一だ。つまりオレ達のせめき合ひがそのまま勝敗を握っているともいえる。」

その言葉の意味、重みはあたしでも分かつた。  
「リバウンドを制する者はゲームを制する。」 まさにその通りなのである。

決して口数の多くなじジローさんとイシナギやんだったが、そのプレーから構えとか役割の重要性を学ばせてもらつた。

もちろんショート練習もかかさずやつた。なにせ合宿中なので時間は腐るほどある。

「ショート練習なんてたいして疲れないでしょ。」

ところがプロの鬼命令により、延々とショート回数を重ねるのであった。

年末の1週間は合宿でみつちりじこかれる毎日だった。

ようやく大晦日と元日は『帰省』が許され、こたつの中であったりのんびり紅白やらお笑い番組やらを見て過げた。

そして1月2日。

再び学校に集合をかけられる男女バスケ部の面々。年が明けてもしごきが休まることはなく、むしろよりいっそう激しくなっている気さえした。

この冬合宿では個人練習だけではなく、積極的に30分3が展開されることになった。

まずPGであるソーマさん、アキヒト、レイちゃんのいずれかがチームに入り、SG、SFが2人ずつ入る。

これをいろんな組み合わせで10分間でメンバー交代、それを30分2セットで行うのだった。

正直言つて人数が少ない分、ボールが回ってくる回数が多いので体力の消費量がハンパない。

この極限の疲労感の中でいかに自分の持ち味を発揮できるかが試されるのだった。

ここで個人練習でかなりサマになってきた、ストップ＆ジャンプシートを披露したいところだ。がしかし、当然マークがあるのでそう簡単には打たせてくれない。

「タイガ、特訓の成果さつをと見せてみる!」

「あい!」

鬼バージョンのコハル先輩はもつ女子相手でも容赦なかつた。

「アカネ、こんぐらいでへばつてシュート外すようならSGやめちまえ!」

「いえ、決めます!」

「アキヒト、パスばつか出してないで自分からドリブルで切り込んでかないと他のヤツがマーク崩せないだろうが!」

「はい、がんばります!」

この特訓にはもう一つの意味合いがあるそうだ。それは『対応力』。どのポジションの選手もともに、どんな選手と組んでも呼吸を合わせられるよつた視野の広さと臨機応変の能力を身に付けるという狙いがあるらしいのだ。

こつしてバスケに明け暮れている間に、あつといつ間に新学期を迎えることとなつた。

女子にとつて悩ましい時期がやつてきた。

「もへへ、どうじよへどうじよへ」

「なによつねわこねね~どうしたつてこいつのよ~」

「だつてレイ、明日はバレンタインだよ?」

「うん知つてゐよ。それがどうかした?」

「誰にあげればいいのよ~」

「誰つてヒメには『王子様』タイガくんがいるぢやない

「はあ? それは100パーありえない! ずえつたいそれだけはイヤ!

「じゃあイベントスルーしちゃえぱいいぢやん。」

「それは女の子としてどうかなつて思つのよね。」

「やつこつこホントに女だよね~」

「ねえ、レイはどうするの? やつぱりゲンキくんにあげるの?」

「まさか。アタシはちやんと『お世話になつた人』にあげるつもりだよ。」

「え、だれよだれよ。」

「そんなの決まつてゐぢやない。」

「もう、もつたいくらないで教えてよ~。」

「男バスのみんなよ。」

「え、なんで?」

「考えてもみなさいよ。5人しかいないウチらがゲーム形式の練習とかできてるのつて男子のおかげなんだからね。これはチョコの一つや二つはあげるわよ。」

「そつか、そうよね。ねえ、それあたしも一緒に手伝っていい？」  
「もちろんいいわよ。あ、でもタイガくんの分だけハート型にする  
んだつたら、それはみんなと別のところで渡してよね。」  
「そんなもん作るか  
！！！」

練習が終わった後、コハル先輩がみんなを集めた。手に持っているのは大きな包み。それはもしゃ？

「今日はバレンタインということでみんなに手作りで作ってきました。去年はちょっと形だけ失敗しちゃったんですけど、今年は見た目も味もバツチリです。」

チョコレートだ。バレンタイン万歳！！！

たしかにかわいくラッピングされた中にはハート型のチョコがいくつも入っていておいしそうだ。

でもなぜか、ソーマさんとジョーさんはもらったチョコをひとつりイシちゃんに渡している。もしかして二人とも甘いもの苦手なのか？

その行動の意味はチョコを口にした瞬間知ることになる。

一瞬、これまでの辛い練習とか、大敗を喫したあの決勝トーナメントの思い出がよみがえってきた。そして口からナニカがでそうになるのを必死でこらえた。

「おいしいですか？」

「うん、今年もまいづ〜」

イシちゃん先輩ツワモノ過ぎです…

オレも含めた1年連中はなんとか1個だけは胃に流し込んで、あと

はバックにしまじこんだ。

「あの、もし良かつたらなんですか？」

あれ、レイちゃんヒメじゃないか。どうしたんだろ。

「アタシ達もいちおうチョコレート作ってきたんですけど食べても  
られますか？」コハル先輩の後でホント余計かもしれないんですけど。

今の惨劇をはた目からではわからないので、本気でやつぱりしている  
ようだ。

「そんなことないよ、喜んで食べなせんもん！」

すかさずソーマさんがそう答える。ズリイ、てことはコハル先輩の『  
アレ』を知っていたな！？

もううんオレ達もいただきましたよ。たぶん普段だつたらヤンケこ  
ウマイなつてレベルのおいしさだつたんだけど、今のオレには高級  
フランス料理店のザガートでも食べてるような幸せなひとときを過  
ごした。

この時ほど女バスつていになつて思つたことはなかつた。

## 今年の春は僕に行ひつか姫

季節はもう春はなりかけていたことの」と。

「遠征に行くわよ！」

突然、レイから告げられた。

「ちよつとあたし達には早すぎるんじゃない？」

「ヒメ、そんな弱気なことじゃ。次入ってくる「一ハイにスタメン取られちゃうぞ？」

うつ、あたしが気にしているところを的確についてくる。

「おもしろそうですね。楽しみです。」

ミズズ、あんたはなんでそんなにポジティブシンキングなのよ。

「アタシは大賛成だよ。思いつきり暴れまわってやるのじゃないの！」

アカネは超強気だ。バレンタインでカズキくんといいことでもあったのだらう。

「強い相手とやれるならどこでもいい。」

サアヤさん、いつも通りなストイックな意見ありがとハラゼーます。

「よし全員一致で決定ね。来週新潟に行くからよろしく！」

いや、『全員』ではないんですけど！ でもこれも強くなるため。あたしだつて負けない！

「今日はよろしくお願いします！」

「こえ、Jリーグでアンドンと胸を借りつもつでかかつてきたださ  
いね！」

「さつきの自信過剰なのはSGの千夏よ。発言に負けず劣らずの名  
プレーヤーだから要注意ね。」

あたし達は軽くウォーミングアップをした後、作戦会議に入った。

「ちなみに今日のスタメンは日程の関係で、相手も全員が一年生よ。  
それでも手強い相手だつていうのは覚悟しておいてね！」

まずあそこで淡々とショート練習をこなしているのがSGの秋穂  
よ。正確なショートは練習を見てるだけでも伝わってくるわね。  
次にSFの時雨よ。気弱な性格しているのとは対照的に、ガンガ  
ンドリブルで切り込んでくるから要注意ね。

P F春海はかわいい顔してスクリーンアウトの鬼だからミスズは  
ポジション取り負けないように気を付けてね。

そしてこの冬美。彼女はリバウンド、ショートブロックともに一  
流よ。ヒメ、かなり厳しいと思つけど気持ちで負けちゃダメよ。」

「わ、わかった。でもそれにしてもなんで他県の選手の情報そんな  
に詳しいの？」

「千夏とは中学時代の親友でね、彼女の引っ越しが決まった時にバ  
スケでの再戦を誓い合つた仲なの。相手は強豪だけど今回たまたま  
スケジュールの関係で空いたから、こつして試合をさせてもらえる  
ようになつたわけ。とにかく、今日の試合はなんとしてでも勝つわ  
よ！」

「はい！」

序盤からレイと千夏ちゃんととのトッピードヒートが繰り広げられた。い

つもはアシストに徹するレイが今回は、10m1の勝負を挑んだり、積極的にゴールを狙いだしたのだ。

その結果は序盤こそほぼ互角に見えたが、後半ベンチ要因のいないウチは勢いが失速し、一方的な試合展開になりつつあった。

あたしはといふと冬美ちゃんに完敗した。身長ではあたしの方が高かつたのに、オフense、ディfenseともに完全に封じられてしまった。

「「来年の春もどこに行こうか」っていうのはこれで決定ね。」  
そうレイが言っている時は、いつも以上に悔しそうな顔をしていた。

「タイガ、練習終わつたらひよつと行き合ひえよ。」  
セツが言つたのはミノルだった。

「ああ。ここけどな?」?  
「それはヒ・ミ・シ」

うぜえ、ソハーリーのスパツと言つてくれた方がどれだけ楽なこと  
か…

そこで練習後、

「明日は何の日か知つてゐ?」

「さあ?」

「3日14日だぜ?」

「それが何か?」

「オマエもどことん、にぶちんだなあ。ソの前のバレンタインでの  
お返しに決まつてんじゃんか。」

「ああ、そう言えばそんなこともあつたかも…」

「よく言つよ。チヨコもうつて一番テンションあがつてたのお前だ  
ら?」

「…もうだつたかも。」

「どういうわけでオレたち3人でプレゼント買にいくというキャプ  
テン命令が出たのである!」

「え、3人でもう一人は?」

「あの~オレ、ずっと前から隣にいたんだけど…」

「アキヒトほんと『メン-ミノル』の暑苦しこトンショウで全然氣づかなかった。」

「『』のタイガ、アキヒトの影が薄いなんて言つちやダメだろ？がー…」「んな」と一言も言つてねえよー…」

「タイガくんヒドイです。」

えつ、悪いのオレ？そしてなぜに敬語？

「ほんとタイガって『テリカシー』とかねえよなー。」

「ミノル、オマエに言われたかねえよー…」

「そんなにボクって影が薄いですか？」

「そ、そんなことないって！アキヒトからはオーラがビンビン出でるよー！」

この子普段はしっかり者なのに意外とさびしがり屋なのか？

「タイガくんてもつと氣配りの出来る、いい人だと思つたんですね。」

ああ、なんかスネテらつしやる。

「だからオレはだなあ～」

「いいんだ、『』セタイガくんには今のボクの姿も見えていないんですよ。」

もうだめだ、ナニ言つても通用しないみたいだから心の中でもぼやいてみる。

「まあいいです。とりあえずお店行きましょー。」

スネると敬語になるのか、アキヒトってば影がつす…キャラが薄いと思つてたら意外な一面を発見だ。

さあ氣を取り直してお返し選びだ。

「へえ～どのお菓子もおいしそうだなあ。」

「おーミノル、オマエが食べたいもの探す」「一ナーラーじゃないんだぞ？」

「わ、わかってるよ、ただ感想を素直に述べただけであってだなあ

…

「あ、これとかいいんじやない？」

そう言つてアキヒトが手に取つたのは、クッキーの形もラッピングも女の子向けなかわいいデザインのものだった。

「よし、それでけつてーーー！」

「え、ちょっと簡単に決まりすぎじやない！？」

「アキヒト、心配するな、オマエのバスケセンスの良さは部内の誰よりも認めてるよー！」

「そりかなか。でもこれとバスケとは関係ないんじや… でもわかつた！それならこれこじみや。」

こうして『お買いもの』はほぼアキヒト一人の力によつて決められたのであつた。

「」の前の遠征試合でボッコボコにやられて正直落ち込んでいた。

ああ～どうしよう、あたしゃやつぱダメダメだあ、あんなに実力差  
みつけられたら心折れるつづのー。  
なんかイイことないかなー

そんなある日の朝のでき」。

「はこ」「」。

そつ無造作に渡されたのはかわいくラッピングされた包み。

渡してきたのはオウジタイガ。

「なによ」「？」

「」の前のお返しだよ。」

「ああ、そついえば。」

「か、勘違いすんなよ？ これは男バス全員分のお礼なんだからな。  
そのお菓子選んだのもオレじゃねえし。ちゃんとレイちゃんにも後  
で渡すんだからな。ただソーマさんがキャプテン命令で「オマエが  
同じクラスなんだから渡せ」っていうから仕方なくだなあ」

「わかつてゐわよ。どうもありがとうね。」

「そ、それは男バスのミハナの前で語ってくれー。」

「あれ〜 オジオジがピーチヒメに[ゲンキくん]プレゼントしてる〜  
うわ〜最悪のタイミングでの男が現れた。

「ゲンキこれは違つんだよ、オレはバスケ部の代表として、  
『いやこやミナまで言わんでもよろしい。ワタクシには全部分かっ  
ております。それが『王子様』から『お姫様』への愛の贈り物だ  
とこう』とくら〜。」

「だから違うって言つてんだろ!」

「さうよ、ただの義理チヨコバレンタインの『お返し』なの!」

「なんだなんだ?」

「お〜、またプリプリコンビがなんかやつてるのか?」

だんだんと人がクラスの集まり始めて注目されるあたし達。いつな  
つてるとあたしは恥ずかしくて何も言えない。

その後もタイガはゲンキくんや周りのみんなに説明していくけど、  
その間あたしはもった包みをなぜか握りしめたままだった。

今日からオレも2年生だ。なんかそれだけで気がひきしまるよな。

「オージー~」

つて、また『トイツ』と同じクラスかよつ

「なんだよゲンキ」

「いや、呼んでみただけ~」

「ふざけんな。『オージー』つて新しいクラスで呼ばれるようになつたらお前のせいだからな~！」

「ちょっとちよつとお、クリスマスのときの『オジオジ』は封印してやつてるんだからありがたく思いなよ。」

当たり前だ！そんなふざけた名前で呼ばれてたまるか。しかし今年もクラスに「オージー」が普及しないように尽力するのは大変そうだぜ。

この苗字のせいで下の名前の「タイガ」つて呼ばせたがつてゐ、ただの馴れ馴れしいヤツつて思われないよにしもしなきやいけないから一苦労だ。

ちなみに他に同じクラスになつたバスケ部メンバーはカズキ、ミノル、リョウスケ、アキヒト、それに女子はレイちゃん、アカネちゃん、サアヤちゃん、ミスズちゃん。

そもそも「当然の」とくるのが、そう小泉ヒメ。（つまり同期は全員集合つてわけだ。）

「またあんたあ？」  
「そりゃこっちのセリフだよー。」  
「もうムダに絡んでこないでよね。」  
「オレがいつ自分から絡んだつづうんだよ！？」  
「まあまあお一人さん、朝からおアツイこつて  
「そんなんじゃねえ！」「ばっかじゃないのー？」

こつしてオレの2年生としての新学期はスタートした。

## あれよあれよでなつちゅう姫

教室の中はざわざわしている。

新しく担任となつた先生が入つてきた。みんな着席。

「はい今から学級委員その他もうもうの役員決めたいと思います。」

するとすかさずゲンキくんが発言する。

「あ、学級委員はオージとヒメでいいと思ひます！」

ちょつとゲンキくんナニ言つちやつてくれてんの？

「あ、オレ知つてる。去年のクラスでおまえら2人『プリプリコンビ』つて言われてたんだろ？」

「そうそつ、文化祭なんか2人で漫才までやつてたし。」

「アタシもそれみたあ。チヨーおもしろかつたよお。」

「プリプリコンビがあ、それ先生も見たかつたな」

おいおい話の流れがよからぬ方向に進んでいますぜ。

「じゃあプリプリコンビでいいと思う人！」

えつちよつと待つて先生それはさすがに急すきやしませんか？

「はーい」

クラス替え初日なのに、なにこの団結力！？

「それじゃ学級委員はオージとヒメに決定な。」

「先生異議あり！」

「なんだオージ？」

「『オージ』つて呼ばれるのキレイなんで下の名前で『タイガ』つて呼んでください！」

そりがい！

かと云ふトコのKTVの中皿分で発送する簡便があるはずもなく…

こひして今年も、アイシヒコンビを組まれるハメになつたのだつた。

ついに「」のときがやつてきた。人から『センパイ』と呼ばれるその田が！

部活の練習前に集まつた一年生にソーマ先輩が声をかける。

「じやあ一年生、軽く自己紹介してもらおうか。」

「畠山瑛二<sup>はたけやまエイジ</sup>って言いますー。身長は一八五センチですー。中学校の時もずっとやつてたんでS.F.やらしてくださー！」

うん、髪も短く、なかなかの好青年だ。

続いては長身の割に細身の彼だ。

「橋嶋彰<sup>はしのばしアキラ</sup>です。身長は一九五あつてし希望です。体の強さなり誰にも負けません。」

いやその細そうな体で言われても説得力ないよ…

「伊藤誠<sup>いとうタケル</sup>。一七四センチ。とりあえずはP.G.狙つてますけどシートも結構いけます。」

おっ、おとなしそうな顔してなかなか強気なこと言ひ子だなあ。

そして最後は「イツ。鋭い田つきと、しなやかな髪が威圧感を放つている。

「平林勝久<sup>ひらばやしきゅう</sup>。身長は一八八。S.F.希望つす。」

随分、無愛想なヤツだな。ていうかコイツもＳＦ希望？しかも一人ともかなり身長高いし…せっかくカズキがこにコンバートしていくたつてのに、まだまだオレのスタメンへの道は険しそうな予感がするぜ。

まあこれでビビってたらオトコがするつてもんだ。ドンといよ、1年ども！

「ウチは人数も少ないしキミらも即戦力になることもあるだろう。だから1週間体力トレーニングこなしたら、その後はドンドン2、3年のメニューに混ざつてもらいつもりだからよろしく！」

「うつす！」

なかなか気の抜けない新学期が始まつたようだつた。

## シックスマンのパンチ姫

放課後体育館で練習していると、一年生らしい子達が顔をのぞかせていた。

「キミたち女バスの入部希望者？」

「はい！」

ついに『センパイ』になるのかあ、いやあなんだか嬉し恥ずかしながら。

集まつたのは3人だった。

「3人とも経験者？」

「はい！」

「じゃあ軽くアップしたら、せっかくだから30回でもやりますか。」

思い立つたら即実践。展開が早いといつか、レイらしいな。

メンバーを入れ替えながら30分ほどゲームをすると、レイが思い出したように言った。

「あ、自己紹介してなかつたね。」

「遅つ！」

ここぞよつやく、新2年生のあたし達の名前とポジションなんかを話し出した。

「次は1年生の番よ。」

まずは背も髪もロングな彼女。

「南野零みなみのシンっす。あつヒメさんて何センチっすか?」

「…181センチだけど。」

「自分身長は178センチっす。ポジションはC希望なんでも3センチの差くらい技術で軽く埋めて、ヒメさんにはシックスマンになつてもらおうと思います!」

い、言つてくれるじゃないの、1年の小娘が。受けて立つてやうつじやないの。

続いてはセンターフォークの髪と、切れ長の目が特徴的な子だ。

「初めまして、優木藍華ゆうきらんかと言います。身長は172センチです。中学校の時のポジションはPFをやっていました。」

礼儀正しい子だな。うん、やつぱりゴーハイツのはいひでなくつちや。

最後はちつちつとヘアラインテールで、まだまだ中学生みたいなきらきらの目をした女の子。

「朝影陽奈あさかげひな、ポジションはSF希望です。155センチですが、デカいだけの人には負けません!…とりあえずヒメさんからスタメン奪いたいと思います。」

マジか、またもやあたしを補欠にじょりと企む輩が一人。

そこでレイがつっこむ。

「ちょっと待つて、それはポジションとかの関係からしてイロイロおかしいでしょ」

「さっきの練習とか見てて、ぶっちゃけゴール下はミスズさんがいれば十分だと思うんです。あたしはスピードバスケにカタルシスを感じるんですね。あたし、きっとレイさんの速いパスにもきっと対応してみせます！」

「ふう〜ん、それはおもしろそうね。まあキャプテンはアタシだから、使えるとおもつたらその起用もなくはないわね。」

ええ〜レイさんそれはないでしょお。でも実力によつてはいたしかたないか…いやいやそんな弱氣でビリするヒメ！負けるなヒメ！

声に出さず、一人心の中で自分を励ますのであった。

## 浮かれ王子

実は男バスの顧問の先生だった歴史の木島先生は、今年で定年退職だつたのだ。

さて、これで新しい顧問を見つけなければならぬという問題が発生したのだが、これはあっさり解決した。

「今年から翔泉高校に転任してきました、黒谷美幸くろたにミコチです。今日から男子の顧問になつたんだけど、あと女子の練習も一緒に監督することになつたから。両方とも初日からバンバン指導していくからよろしくね」

そう言つて現れたのは見た目は三十歳前後でけつこつキレイな先生だった。

全員ウツキウキである。

「やつた、念願の顧問だー！」

「しかも『お飾り』じゃなく監督やつてくれるつていうんだからサイゴーだぜ。」

「これで美人だし言つことなしだな！」

「カズキ、そんなこと言つてるとアカネちゃんに怒られるぞ？」

「だいじょぶだつて。それに、彼女がいるとかは関係ないのだよ。

それはそれ、これはこれだよお子様タイガくん」

「誰がお子様だー！」

そうやつて浮かれていた男子諸君は練習一回目でその認識の甘さを痛感する。

「ほりー、そこ手え抜いてないでもうと走るー。」

「だあ～どうしてそこでシユート外すかなあ、罰として腕立て30回。」

絵にかいたようなスバルタ特訓が開始された。

今までの練習もきつかったが、監督初日といふこともあって黒谷先生のテンションはマックスで加減といふものを知らなかつた。

けつきよく、部員全員が心身ともに追い込まれた一日となつた。

練習が終わつて黒谷先生が帰つた後、コハル先輩がボソッと言つた。  
「これで監督の後継者問題は無事に解決しました。これで安心して次世代にバトンを託せます。」

仮にも顧問の先生をそんな上から目線で片付けますか…  
コハル先輩、オレが思つてたよりだいぶ肝つ玉の強い女の子らしい。

でもこの言葉の中には、自分たちの代では全国出場できないんだといふ悔しさと哀愁もこめられていたような気がした。

## 鬼のじいさに負けない姫

黒谷先生のスバルタ特訓は女子に対してもそれは変わらなかつた。まだバスケ歴1年があたしにも当然の「」とく容赦はない。

30回では何度もサアヤやヒナにドライブで何度も切り込まれてしまつた。

「ヒメ、あんた抜かれ過ぎよ。こなのに全然ゴール下守れてないじゃないの！」

そしてシズクとの「ゴール下争いではこと」とく負けていた。

「なにやつてんの、自分より身長の低い相手に簡単にリバウンド取られていいと思つてるの？」

あんたこの1年なにやつてたの？」

最後の言葉はずしりと効いた。

自分では一生懸命この1年がんばってきたつもりだつたのに、それをあつさりと否定されたようで悔しかつた。自分の今までの努力を簡単に流されたようではらが立つた。そしてなにより、それが真実だと分かつてから何も言い返せなかつたのが余計にみじめだつた。

だがその夜は泣かなかつたし、落ち込みもしなかつた。それは今まで散々経験してきたことだつたし、今さら何も失うものなんてないつていふ開き直りだつたのかもしれない。だからのか知らないが、次の日の練習も罵声を浴びながらも練習をこなしていくのであつ

た。

「めっし めっし 三度のメシよつづまにめっし」

この、謎の歌を歌つてるのはミール。

そう、今は昼休みだからアイツほどじゃないにしてもみんなウキウキ気分なのだ。

「リョ～スケく～ん、今日はどんなお肉が入っているのかな～？」  
「言つとくけどミール、オレの弁当にどんなもんが入つていようと、オマエの腹にはおさまらねえよ。」

「うわ～相変わらずキツツ～イつっこみですか。」

2年的新クラスになると自然と、いつもして男バスでメシを一緒に食うという流れになつていた。

ちなみにカズキとアカネちゃんは2人で毎日ラブランチだ。

いつもはバカ話ばつかなのだが、監督も入つて気持ちも引き締まつたのか、今日の話題はバスケのこと。

「なあ猛将の強さハンパなかつたよな～。」

「ホントだよ、どうすりや倒せるのか全然ビジョンがわかねえ。」

「うわ～、ドリブルバカのタイガさんが『ビジョン』とか言つてしますぜえ。」

「うるせえジャンプバカ！」

「でもその気持ちわかるぜ。オレはシユースケ先輩の代が中心のチームとも戦つてたけど、はつきり言つてあれ以上だった。この部活

には足りないものが缺かざる。「

「たとえば?」

「絶対的司令塔の不在とかな。」

「くつそ!」

「わりいアキヒト、別にお前のこと責めてるわけじゃないんだ。」

「うん、分かってるよ。でも高校から初めてバスケやったソーマさんを超えない今のオレじゃ、チームになんの力にもなれないのが事実だよ。」

アキヒトが悪態つくのも悔しそうにするのもこの時初めて見た。

「やういえばずっと気になつてたんだけどさあ。オレの年の離れたバスケ部だった兄ちゃんがいるんだけど、兄ちゃんが言うには「こいらじやすつと精機高校が絶対王者だつたって聞いたけど。」

「それが猛将は、去年監督が変わつてから強くなつたらしい。選手を活かすのが異様に上手いから、選手が最大限に個性發揮してるしな。あれを倒したシユースケ先輩たちはホントすごいの一言だよ。一緒にプレーしてるとときは気づかなかつたくらいにな。」

「あと、去年3位だった高校も夏の大会と違つたよな? たしか彩色学芸高校だつたっけ?」

「あ、それウチの姉ちゃん行つてるとこだ。元々ベスト8ぐらいの実力はあつたらしいんだけど、なんかそつちは3年前に監督変わってから急に強くなりだしたらしいよ。」

「ふうん、監督つてやっぱ大事なんかもな。」

「いい」ミノルの発言で話はそれでいく。

「ていうかタイガ姉ちゃんいんのかよ~いいなあ~。オレなんて兄ちゃんだから小っちゃいころからパシられたりとかばつかだよ~。」「ふ~ん。」

「交換しない?」

「いみわかんね~。それに姉ちゃんつつても結局いじめてくんんだぞ?」

「まじかよ~。女兄弟憧れあつたのにな。」

「まあ今その幻想が崩れて良かつたな」

「そういえばリョウスケって兄弟とかいんの?」

「オレ? 2コ下の弟一人だけど。」

「お、もしかして翔泉バスケ部に入ってきたりする?」

「さあ、それはわかんねえなあ~あんま話ししないし。」「ぜつたい来てくれるよつに推薦しとけよな!」

「なんでだよ?」

「だつてソックリかどうか見てみたいんだもん」

あれ、会話に参加していない子が約1名。

あつ忘れてた~

「えつと、アキヒトは兄弟いる?」

「…一人っ子ですけどどうかしました?」

さすがのミノルも言葉が出てこないでいると、「いいですよ、どうせボクは兄弟もいないよつなづまらない人間ですか。」

その後、普段取り乱さないリョウスケも含めての3人でアキヒトをなだめるのに昼休みの残り全部を使ってしまったが、しょうがないか。

## 「コーハイを陰で支える姫

今年も夏の地区予選が始まった。

「せつかく補欠メンバーもできたんだし、体力とか気にせず全力でぶつかっていいからね！」

「はい！」

黒谷先生からスタメン発表を告げる

「今日のスタメンはレイ、アカネ、サアヤ、ミズズ、シズクでいくわよ！」

「はい！」

つて、あたしは補欠か～！

まあ1年がんばったとはいえ、中学までみっちりバスケしてた人はそう簡単には勝てないか。  
でも悔しい～！！

しかし試合が始まると自分がちょっと自信過剰になつていたことに気付く。

レイはインサイドのシズクにボールを積極的にボールを集め、ゴール下から確実にゴールを量産していた。

ディフェンスの際にもシズクの動きは絶好調だった。相手がシュート態勢に入るとありえないくらいの反射神經で飛びついて、シュートブロックを決めていた。

しかしかなり攻防ともに「チャな動きばかりするのでスキが多くなつていても事実だつた。でもそこはミスズがうまくカバーしてその穴を埋めていた。力技だけじゃなく、こうこう細かいこともできるところはさすがといふしかない。

シズク投入によるチーム力の大幅なパワーアップにより（言つて切なくなるなあ）、40—21で大きくリードして前半を折り返した。

「うん、思つた以上に大きくリードできたみたいね。それにしてもシズクいい動きするわね。」

「あざーす！」

「よし、後半からヒメと交代よ。」

「えつ、なんでっすか！？」

「だつてあんたバテバテじゃないの。」

「そんなことないっすよ、まだまだ全然いけます。」

「自分の疲れに気付けてないなんて3流プレーヤーもいいとこね。」

「うつ。」

黒谷先生キック

「それとミスズもかなりフォローで疲れてるみたいだからアイカに代わつてもらいましょ。」

「はい。わかりましたわ。」

「そう、こうやって素直に認めることも大事なのよ、シズク。お分かり？」

「…はい。」

黒谷先生となにか約束でもしたのか、後半になつてもレイはあたしとアイカにボールを入れて、徹底的にインサイド勝負に持ち込み、その期待に応えられたかどうかわからないが見事に勝つた。

続く2回戦。

「今日はレイ、アカネ、サアヤ、ミスズ、そしてヒナでいくわ。」  
またしても補欠…

ていうかこのポジションの偏ったメンバーで大丈夫なんだろうか？  
そんなあたしの疑問をアカネが代弁してくれた。

「あの、ほんとにこのメンバーでやるんですか？」  
「えつだつておもしろそうじゃん？」

この人はどこまで本気なんだろう。

ヒナは自分でスピードバスケを自負するだけあつてドリブルのスピードもかなりあるし、バスを出すタイミングもかなり速い。

それと異様に燃えている人がもう一人。

サアヤだ。前の試合であまり活躍できなかつたうつぶんを晴らすよう、ヒナとダブルSFとして見事な連携を見せて得点を稼ぎまくつていた。

しかしこれで大変なのはミスズである。サアヤはともかくヒナはけ

フリースローを外すのドリブルンド勝負を一人で何度もさせられた。

「派手でかなりおもしろかつたけど、さすがにミスズも限界ね。後半からヒナも抜いてヒメとアイカ入れるからよろしく。」

「はい！」

「あたしまだ全然イケますよ！？」

「ヒナ、あんたもバカ？どんどんスピード落ちてくるわショート入らなくなるわ、自覚ないっていうの？」

この一言で完全にヒナは黙りこくれてしまつた。

さらり「いい」で不服そうな顔をしてシズクが抗議する。

「あの、ヒメさんじやなくてアタイじやだめなんすか？」

「あんたみたいなめちゃくちゃプレーに大事な後半任せられないわよー。」

「…はい。」

後半はアイカと一緒にインサイドを手堅く守り、前半のコードもきいたのもあって勝つことができた。

この2試合を通して思つた。

よかつた、あたしもまだまだ全然やつていけるみたいだ。

ダムダムダム

キュッ

シユバツ

「イエー、まずは2ポイント~」

「そんなのすぐに取り返してやりますよー。」

ここ、翔泉高校の体育館では来たる地区予選に向けて、『S.F.スタメン争奪戦』なるものが繰り広げられていた。

その方法とはすばり、Hイジ、カツヒサ、オレによる『1001』総当たり戦。

選抜方法はスコアだけでなく、その様子を黒谷先生やコハル先輩がチェックし、今度の試合のスタメンを決めるというものであった。

こちとら念願のスタメンがかかってんだ。そうやすやすと負けるわけにはいかねえな。

さて、1年生君のお手並み拝見といふか。

エイジはなかなかプレーの幅も広いしボールハンドリングの技術は認めるが、それじゃオレは抜けねえよ?まだまだ『中学レベル』つ

てのがプレー」にじみ出てんなあ。青い青い。なんたつてオレはこの1年で一流選手のドリブルを何度もDVDで研究しきってきて、それに対するディフェンスも日々実践してるんだからね。

カツヒサはドリブルの突破力はなかなか目を見張るものがあるが、それだけだな。なんか昔のオレを見ているよつだぜ。動きが単調すぎる手に取るように分かるつつの！

「うしあわ――――――――」

見事オレが優勝した。スコアもエイジ相手に18-12、カツヒサに至っては22-10だし、これは文句なしだろう！

「よし、次のＳＦのスタメンはカズキで行くか。」「そうですね。」

えつ？

ちよつと待つてよ、お姉さん方……

それはあんまりじゃないですか？

こうしてオレの1年間の思いがつまつた努力と純情を兵器で……じゃない、平気で踏みにじつた魔女2人であつた。

## 放課後ティータイム姫

3回戦の相手はお茶の時女子高校とこうといふらじこ。なんでも創部2年目だといふから、ウチと一緒にじゃないか。

勝手なイメージだが、なんかしお田の高いお嬢様方がそろつているんだろう。そんなとこに負けるわけにはいかない。

会場に入ると、黒谷先生が相手選手を堂々と指を指しながら説明した。

ちなみにお茶女高校のみなさんほとこつと、仲良くお紅茶を飲んでいらっしゃる！？

「まずはPGのコイ。ほんわかしたちょっとゆるめな子だけど、試合に入った時の集中力は相当なものよ。」

あれ、雰囲気がちょっとあたしのイメージしたのと違う？ でもほんとだ、先生の言つとおりなんか動きがふわふわしてゐよ。

「続いてSGのミホ。はすかしがり屋だけシユートの時は冷静沈着に決めてくるわ。」

いや、「はすかしがり屋」の情報はいろいろでしょ。

「それからPFのムギ。見た目がおひとつしてるからって油断しちゃダメよ？」

でも一人お嬢様オーラが出てる子がいた。どうやらひつとも生糀のお嬢様、ミスズの相手になるよつだ。

「やしへのりつむちゃん。そんなに大きくなれないけど強敵よー。ヒメとシズクは覚悟しておいてね。」

「あの、あだ名で紹介されてもテンションでこいつが、士気が下がるんですけど…」

「だって資料にやつ書いてあるんだもん。」

そこですか。

「それどいつもあずむちゃん。一年生ながらースをつとめてくるわ。」

「え、なにこやんだって? もうここや、とつあはずがんばりー。」

「それじゃこくわよー。」

「はいー。」

負けた。

ボロ負けだった。

普段は騒がしい面々だが、試合が終わつたあと誰も口をひらかなかつた。

「これからまた戦つ」となる、そんな予感だけがした。

「ティーフンス！ ティーフンス！」

何回なつてもスタマン落ちてくやしい……

もつここれは恒例行事になりつつあるな。

試合はオレの出番が必要ないほど（？）、一方的な試合展開となつていた。相手はたしかにベスト8にあがつてただけはある実力校であるが、それでも攻守ともにウチが圧倒していた。

3年生は特に最後の大会とあってその意氣込みは尋常じやなかつた。ソーマさんはこの日も冷静に、的確に、そして素早く味方にバスを送る。

またもやジョーさんのショートブロックが華麗に決まる。

そしてイシちゃんの豪快なダンクでリングがきしむ音が会場に響き渡る。

前半はスタメンだけの活躍で20点差まで差が広がつていた。

「後半アンタ達出すけど、これで点差縮められるよ! だつたら家までランニングだからねー。」

「ハル先輩のフレッシュヤーもこつも以上に絶好調みたいだ。

「…す…」

とは言つたものの、一年も含めての総入れ替えに若干の不安もない。それを見透かされたのがどうかわからないが、ミノルがこちらの顔をにやにやしながらのぞいてきた。

「お~! タイガ、新人戦ときみたく緊張してんじゃねえぞ?」「うつせえミノル! 言つとくがオレはとっくに臨戦態勢入つてつからなー!」

「ほえ~ 成長しましたな~。」

「あ、疑つてんだろテメエ! つていうかマコト、アキラ、お前らこそ高校の初試合でテンパつたりしてねえだろうなー?」

「タイガさんほどじゃないですよ。」

「オレもっす。」

言つてくれるじゃないか、まあ頬もしい限りではあるが。

実際試合が始まつてみると、我ながらその言葉にウソはない結果を出せたと思う。

アキヒトからのパスを受けた連係プレーはハマリ、DFらしく何度もシュー<sup>ト</sup>を決めた。

今回はしつかりディフェンスも機能できていたと思つ。

さらに終盤ではカツヒサとエイジも投入し、フォワード力を高めてさらに得点を引き離しにかかった。

ペー

後半でさらに10点差をつけて、試合は圧勝に終わった。

とは言つても、前半で勝負がついていて相手チームの士気が下がっていた感も否めないが。

とにかくにも、なんとか罰ゲームのランニングを免れたオレ達は、清々しい勝利の余韻に浸っていた。

「浮かれてるんじゃないぞー。」

そんな1、2年の気持ちに気づいているのか、試合後のミーティングではソーマさんはいつになく厳しい声を出していた。

そうだ、これからが本番だ。3年生を中心として決死の、しかし絶望的な戦いが始まる。

## その日に刻んでおく姫

男子はいよいよ決勝トーナメントに進出だ。黒谷先生の提案で、あたし達はそれを応援しに行くことになった。

あまりにもあつさり負けてしまって気持ちの整理のつかないあたし達の気分転換でもあるそうだ。

しかし当日になつてみるとその悔しさもなんのその。なんだかみんな浮かれて遠足気分。レイがみんなのお菓子チェックを始めた。

「アイカ、それなあに？」

「塩キャラメルクッキーです。」

「おいしそ、一枚も～らい。シズクあんたやたら荷物多いわね。」

「そうつすか？」

「なに入つてんのかなあ～？」

カール、じゃがりこ、かつぱえびせん、カラムーチョ、とんがりコーンつてアメリカ人か！  
どんだけスナック好きなのよ。

「どれどれミスズは？」

「わたくしはたいしたものじゃないんですけど。」

いやいやいやいや、あなた見たこともない高級そうな包みを手にしているんですねけど。

「さすが格が違うわあ～。あとでけよつだいね。」

「もちろんですわ。」

そう言つてゐる間にも、サアヤは一心不乱に食べてる。なにをつて、ピノ、パピコ、アイスの実、爽、そしてガリガリ君…

「んだけ「冷たい女」なのよあんた。見てるうつむきが寒くなるわー。」

「ねえアカネはお菓子なに持つてきた?」

「ん~とね、つぶつぶいちじるポックキーと、ハイチュウイチゴティー  
グルト、きのこの山かじりシロウラ、あとはアポロ。」  
いや、「ぱつかりやんけー!」

「やうこりレイは?」

「あたしゃミルクチヨコレートとミルククッキーとミルキーーー!」

「…別にそれ食べても背は伸びないと思うよ?」

「そんなんじやないし! ただ好きなだけだもんーー!」

なんかレイちよつとかわいいつ

「気が合こますね、レイさんあたしも同じですー!」

ヒナ、おまえもか。

「やうこりヒメは?」

「え、あたしはのり巻きせんべえと離島布。」

「なにそれ、おばあちやん?」

「色氣なさすやこーあははは」

「ほつとけー言つときますけじどしきもめつちやおいしいんだから  
ねー」

「はこはーー」

最初はどこか楽しげな雰囲気もあつたあたし達も、試合を始まると  
それが一変した。

まずそのプレーの激しさに圧倒されてしまった。

ドリブルであつといつ間にコートを駆け上がったあと、激しいゲーム下での攻防からの華麗なショート合戦が繰り広げられている。

これが全国をかけた戦いつてやつか。

翔泉高校も3年生をはじめ全員がこれまでにないくらい、いいプレーしていた。もちろん前からずいぶんとは思ってたけど、改めてウチの男バスの強さを知った。

あたし達も少しでもその力になれるように必死に声を出して応援していった。

しかし健闘むなしく結果は3戦全敗。

最後の試合が見終わつた後は、みんな口数少なかつた。

「すじかつたね。」

「うん。」

そう言つたきり全員がまた黙る。その沈黙の中誰かがつぶやいた。

「遠いな…」

あんなに強かつたセンパイはもついない。

男女の違いはあれど、改めて高校バスケの厳しさを感じた。

それは男バスの前途多難な道を示していくよつにも感じられた。

頼りになるセンパイはもついない。

タイガたちうまくやつていけるのかな？

あたし達もたくさんお世話をなったなあ。

あたし達が引退した時にはこんな風に思つてもうれるよつになるの  
であろうか。

そんな、いろいろなことを考えさせられる数日間だった。

試合の終わった次の日の送別会で、オレ達2年から引退する3年生にメッセージを書いた色紙を渡した。

「おまえら…」

そう言つたきり、ソーマさんは言葉が出てこない。ジョーさんは表情が固まつたままで、イシちゃんは男泣きを始めている。

「あつ、もつ一回返してください。今から読み上げますから。」

「アキヒトせんぱいへ あの天才的なボールをばきにいつもびつくりして動けませんでした！ ミノル」

「ふつ、なんだよそれ。」

うわつ出鼻からムードぶちこわしな内容づつ「みやがつて…

「ソーマせんぱいへ そのノリのいいとこ大好きでした。練習中でもいつもオレらを楽しませてくれてありがとうございました。タイガ」

「おまえも十分おもしろかつたよ。」

「ソーマせんぱいへ あの試合で不意を突いたパスで相手を出し抜いたあれ、サイコーでした。カズキ」

「ありがとよ。」

「ソーマせんぱいへ いつもメッセージいいバスくれるのに、オレが全然シート決めなくてすんませんでした！ リョウスケ」

「そんなことねえよ。良く決めてくれてたよ。」

「ソーマせんぱいへ プレーでもポイントガードとしての見本を見せてもらいました。今までも、そしてこれからもずっと尊敬します。アキヒト、うひ」

感極まつてアキヒトはソーマさんに抱きついた。

「おまえが先に泣くなよ～～」

「うひ、ぐひ、すいません。。」

「え～続きまして、ジョーせんぱいへ センパイと「コンビ組んで攻めてるときチョーやりやすかつたっす！ カズキ」

「ジョーせんぱいへ あの強烈なショートブロックに何度も助けられたかわからんないっす、すごかったです。リョウスケ」

「ジョーせんぱいへ いつも縁の下でチームを支えてくれていてかつこよかったです。 アキヒト」

「ジョーせんぱいへ ぶつきらぼうに見えて時折優しくしてくれるので、オレ知つてます。 タイガ」

「ジョーせんぱいへ 絶対オレ、ジョーさん超えるパワーフォワードになつてみせます！ ミノル」

ジョー先輩は下唇をかんできつと黙つたまま、色紙を受け取った。

「イシちゃんせんぱいへ まつたりしたオーラは部の雰囲気を癒してくれました。 アキヒト」

「イシちゃんせんぱいへ その大きな体は「ホールドは心強かつたです。 リョウスケ」

「イシちゃんせんぱいへ センターの手本となるプレー勉強させ

てもらいました カズキ

「イシちゃんせんぱいへ ありえない食べっぷりにはいつも驚かされました！ ミノル」

「イシちゃんせんぱいへ あの最後の試合での豪快なダンクはたぶんずっと忘れることはないと思います。 タイガ」

オレがそう言い終わつたあと、イシちゃんのアツイ抱擁、もとい全カタツクルが飛んできて死にそうだつた。

「それとコハルせんぱい。」

「は、はい！？」

「コハルせんぱいへ 厳しい指導とかわいい笑顔でいつもオレたちを優しく包み込んでくれてありがとうございました。 リョウスケ」

「え、ええ～もしかしてわたしの分まであるんですか？」  
「当たり前じゃないですか。せんぱいも『センパイ』なんですから。

「うう、そんなこと言つたら泣こちやうです。」

ちなみにコハル先輩はソーマさんの分が読まれてるときから一人で大号泣している。

「じゃあ次はタイガだな。よろしく！」

途中で流れが切れたからやりづらいな

「コハルせんぱいへ DVDいつも見てます。オレ、コハル先輩のおかげでスゲエ成長できたと思ひます。ほんとに心の底から感謝

します。 タイガ」

「タイガくん…」

「コハルせんぱいへ オレ、センターにコンバートしてもらつて  
今すげえやりがい感じます。絶対この『恩はプレーでお返ししま  
す。 カズキ』

カズキ 気合い入つてんなあ。

「コハルせんぱいへ いつもオレのことじヤンプバカつて叱つて  
くれてありがとうございます！ ミノル」

オマエ最後までバカまるだしじゃねえか。

「コハルせんぱいへ 自分に自信のなかつたオレがここまで来れ  
たのもコハル先輩のおかげです。今までありがとうございました。

アキヒト」

最後はアキヒトがきれいにシメてくれたな。

この後黒谷先生もちで派手に焼肉パーティーをして、それを最後に  
3年生の4人は部活を去つた。

## 新部員追加で热闹な姫

「新しい部員を紹介する」

黒谷先生がそういうて現れたのはあたしより少し背の低そうな人影。だいたい175センチくらいか？

またあたしのスタメンへの道が遠ざかつてしまつではないか。

肩まで伸びた明るい色の茶髪はキレイで、光を反射してキラキラしている。髪が傷みやすくてショートにしかできないあたしからしたらなんてウラヤマシイ。それにしてもなんでこんな中途半端な時期に入部？まあ細かい」とは気にせず、「こには温かく迎えてあげなくひや。

「では自己紹介よろしく。

「はーいーーまだまだぴちぴちの15才、菊池真佐美です。よろしくでいいす」

ノリ軽っ！

ちょっと一緒にやつてく自信なくなってきたかも。  
あたしテンション高こうつて苦手なんだよなあー

「えへ男の子といふことでも監もこりこりと最初は戸惑つ」ともあると思つたび、せつかへのマネージャーなんだから優しく迎えてあげるよひやむる

「はーい

ふうん、マネージャーなのか、ちょっと新鮮だな…

「つて男！？」

「ナニ言つてんのよヒメ。見りやわかるじゃない。」

「だつて男バスに女子マネはよくあるパターンだけど、逆はあります  
ないでしょ？」

「偏見だよそれは。せつかく入つてくれたんだから大事にしない  
いと。」

「いやムリムリムリ！全然頭がついていかない！」

いや、落ち着いて見てみりやオトコ以外のなにものでもないよね。  
あたしがはなつから女の子の新入部員だと思い込んでたからビームら  
い勘違いをしてしまつていただけで

「ヒメさんでおもしろいっすね、好きになっちゃいました

「へ？」

「良かつたじやん、ヒメ念願の彼氏ゲットできて。でもマネージャ  
ー独り占めしないでよ？」

「つっせこアカネ！そ、それに別に今のは告白つてわけじゃないし  
！」

「ひび～いヒメさん！オレの精いつぱいの愛の告白をそんな風にス  
ルーするなんて。」

「え、本気なの？」

「当たり前じやないっすか。つてホントは前からヒメさん見かけて  
て、それでイイなつて思つてたんすよ。それで女バスのマネやって  
みよつかなつて思つたんす。」

「いやだつてあたしキミより身長高いんだよ？」

「そんなん全然関係ないっす。愛があればそんなん簡単に乗り越え  
られますから！」

「ひゅ～ひゅ～おアシイ」って

「ヒナ、せんぱいからかうんじやない！」

「これは浮氣ですか、さつそくタイガくんに報告せねば。」

「レイ、なんにも報告することなんてないーそれになぜに「タイガに」なのよ！」

「あ、そうだマサミくん言い忘れてたけどヒメにはタイガくんという男バスに許婚こいなすけがいるのよ。でもがんばってー応援するからー。」

「何もかもちつがーーうー 黒谷先生へなにか言つてやつてくださいよーーー」

「まあ部員の這つた惚れたにかかるつもりはないけど、ほびほどにしな。いやあ、それにしてもタイガとそんな関係だったとは意外だな。もてもとのヒメさんは早く結論出して、精々早く三角関係解消しなきことや?」

「もつだめだ。誰もフオロービジがどんどん探し進める気マンマンだ。」

「さて自己紹介も終わつたことだし、練習始めますか。」

いや肝心の自己紹介は名前くらいしか分かつてないと思いますけど?あとまだじょうもなく軽いオトコだつてことくらいにか。

その日、あたしは気が動転しまくつてバスはどういぼすは、シュートはリングにかすりもしないわ、拳句の果てにはリバウンド取りにいつて顔面でボールキャッチするわ、散々な練習田となつた。

## バトン王

3年生の送別会があつた次の日に、残されたオレ達1、2年はミーティングに召集されていた。

「昨日までよく戦つたわ、ご苦労様。でもね、あなた達はその余韻に浸つている暇はないの！」

第一声から黒谷先生はかなりキツめなコメントが飛び出した。

「今までのチームに何が足りなかつたかわかる？」

誰もすぐには返事はできなかつた。これでも、やれるだけのことは精いっぱいやつてきたつもりだつたからだ。

「それは『経験』よ。」

黒谷先生はそう言って一人一人の顔をじっと見つめる。目が合つた時、「やっぱキレイだな」とか不謹慎なこと考えてたけどすぐに気持ちをきりかえた。

「バスケットに限らずスポーツは生まれ持つた才能だけでなく、練習や試合で積み重ねられた経験がものをいうものなの。それは中学までの蓄積はもちろんのこと、高校で積み上げてきた一日一日が大事であることは言わずもがな。はつきり言つて、これまでのチームで一番の不幸は3年生が3人しかいなかつたことだわ。特にソーマくんはあれほどのセンスを持つていてたし、もし中学からバスケを始めていればもっと実力のあるプレーヤーに成長していたのにと思うと、残念としか言いいようがないわね。」

改めてそういう風に分析されると、3年生たちの無念が伝わってく  
るようだつた。

「ソーマくんやコハルちゃん達もそれを痛感して、あなた達に『夢』  
を託したつていうのも聞いたわ。アタシはそれを聞いて、そしてあ  
なた達のプレーを見て確信した。この一年、全員がバスケにすべて  
を捧げる覚悟があれば不可能じゃないー」

「それって、ほんとですか?」

「こんなとこでウソついて庇ひやうするのよ? ただ、ホントにみんな  
その覚悟はあるー」

「はーーー!」

すぐに返事をしたのは2年の面々だけだった。

「言つとくけど2年生の5人でも十分じゃないんだからね。今はま  
だピンと来ないかもしけないけど、1年生にも同じ気持ちがあるの  
かしら?」

「はー、おれバスケのために翔泉高校來ましたからー!」

「言つねーマコトーー!」

「すじません、つい感動して泣いてしまつてました。オレもやりま  
すー!」

「よく言つた、ハイジー!」

「正直3年生の想ことかは半分くらいしか分かつてないすけど、

でやるやせんやるなり全国田舎したこつすー！」

「オレもやんな感じひす。」

「うそ、それでいこと思ひよ。アキラ、カシヒサ」

「じやあ早速、やの第一歩となる練習始めましょつか

「へへへー。」

## 意外となる女心な姫

男子の方はセンパイが抜けて新チームとなり、ここ最近はハードな練習をこなしている。はたから見えていてもひとりひとりがモチベーションも高く、目的意識を持つてバスケをしているのがわかる。それに比べて、どうも真剣ムードに欠けているのがわが女バス。ここ一週間は黒木先生が男子の方につきっきりでこうのもあるナビ、このたるんでる雰囲気の原因の8割はロイツのせい。

「チイース！ 今日も張り切つてバスケつていきまつしょ～～

そう、地区予選が終わって急に湧いて出てきた新入部員、とういか新マネージャーのマサニ。100歩ゆすって「オトコ」ってことは許すとして、あのノリの軽をぐらははどうにかならんものか。なんだよ「バスケつて」て。

「ねえレイ、やつぱまサマミくんクビこしない？」  
「なによヒメ、珍しく過激な冗談言つじやない。」  
「違つわよ、あたしは本気！ なんか彼が来てからイマイチ部の雰囲気にもジメが足りないっていうか、集中しにくこのよね。」「うへん

とか言つてゐるそばからキャッキャキヤッキヤした声が聞こえてくる。

「マサニ〜くせ、こつも元氣だねつ。ヒナもとつても元氣出るわ～」「あざ〜す！ もうどんどんテンションアゲアゲでいくよ～～」「そんなことよつと、アタイのショートビーチよ～～」「もうサイコーだよシズクちゃん！」  
なんだかしねないが、一年のうち2人までもがそれに対してもござ

らでもない様子なのだ。

いくら部の中に急に男子が入ってきたからと言ひて、ちよつと色気づきすぎやしないか？

これが残りの2割だ。

「ね、あの2人かなり様子がおかしくない？」

「あの一人はミョーにヒメにライバル意識をしてるからあんな告白まがいのことされて嫉妬してるだけよ。「あんなデカいだけの女のどこがいいのよ、アタシの方がよっぽどカワイイじゃない」ってね。そういうことだからキーシナイキーシナイ。」

「う～ん、そうなのかなあ。…ってデカいだけウンヌンあたりはちょっと氣になるけど。」

「むしろマサマサ入ってきてからのはうがその「田」を飯にしていい動きしてるわよ、あの子たち。勝手に動き悪くなってるのは告白されて浮かれちゃってるヒメくらいいじゃない。」

「あたしは別に浮かれてなんかない！」

「じゃあ問題ないじやないの。さつ無駄話は終わりー練習始めるよ

つ

「は、はーい

そつか、あたしひとりが意識しすぎなだけか。なんだかうまくはぐらかされただけのような氣もするけど。

「ヒメちゃんお疲れっす。はいタオル。」

「あ、ありがと。」

まあ少なくともマネージャー業はしつかりこなしてくれてるわけだからいいか。要するにあたしの氣が抜けているだけなんだから、気持ち切り替えてがんばるぞっ。

よしつ、気合い入れ一発田のショートツツ！

ガスツ

「ヒーメー」

じつやら気持ちの切り替えにはまだまだ時間がかかるようだ。

## 勘違じHIN（前書き）

今日ついに、10000円貰いました！

今まで読んでいた正在の方ありがとうございます。これからも更新がんばっていきたいと思います。

今日は久しぶりに学級委員のお仕事で居残り。というか2年になつてからは初なのだが、なにぶんパートナーが『アレ』なもんでこれっぽっちも新鮮味がない。しかし2人ともボーッとしたまま、手は動いていない。ほんとはさつさと片づけて部活に行きたいのに、担任の先生がいないと進まない内容なのだ。しかもよりによつて今日は職員会議だとたで先生は遅れている。まったくあの先生のテキトーさにはハラが立つ。

しゃあないからヒメ相手にムダ話でもして時間つぶすか。

「そういえば昨日見かけたんだけどさ、部員増えたみたいじゃん、なんていうのあの女の子？」

「入部してから10日以上たつのに今頃気づいたの？マサニイベ。言つとくけど男の子だよ。」

「マジか、オトコかよ！？全然気づかんかったあ。」

「ば、ばつかじやないの！？どう見たつて男じやない。どんだけ人を見る目がないの！？あなたの目は節穴ねつ。」

「まあそんなにじっくり見てたわけじやないからな。そういうえばそんな気もするかも。」

なんだか知らないが、ショッパンからヒメはケンカモードだ。ホントはこっちもキレかけたが、まあオレもそろそろ大人にならないとなつて思つて話はテキトーに合わせておいた。それにしてもほんと女つて意味わからんねえ。

「でもなんで女バスに男マネ？あ、わかつた。もしかして女バスの中に好きな子いるとか？誰誰？教えるよ。」

「そ、それは…知らないわよつ、そんなこと…」

「ふうん。ま、ほんとに好きな子がいたとしても恋愛事に一いつづそう

なオマエにわかるほどそこいつもバカじやないか。」

「失礼ね、いつときますけどマサニくんはあたしのこと…。やっぱなんでもない。」

「「あたしのこと」？あつわかつた。オマエが男だと間違われたんだ。マサニってやつの考えはこうだ。ある日女バスの練習をちらりとのぞくと女子に混ざつてテカい男子が突つ立つてる。「なんだよ、女バスにもうすでに男子いるじゃん。」それで安心して入部してきた。どうだ、当たりだろ？」

「まったく毎度毎度失礼なヤツね、違うわよ。そんな勘違いするバカはあんたぐらいだつつうの！それにアイツは女子の中でも男一人でも平氣なくらいずぶとくて、しかもただの女好きのチャラ男なのよつ！」

「そんなん必死にならなくてもいいじゃねえか。」

ヤバい、だんだんムカついてきた。しかしここでキレちゃだめだ。センパイもいなくなつたし、オレは部活だらうがクラス内であろうが頼れる人間になるつて決めたんだ。

しかしオレの決死の覚悟も、次の言葉で崩壊する。

「ちよつとだまつてくれる！？ヒトが一生懸命忘れようとしてることズカズカ聞いてきてなんなのよ、もう！教室にいるときくらい違うこと考えさせてよね。だからあんたと2人つきりなんてイヤなのよー！」

「ふざけんなよ、さつきから意味不明にキレまくつて。お前は活火山か！しゃべるたびイチイチ噴火して、こっちこそいい迷惑だ！」

「またそうやってあたしを山なんかに例えてバカにして！言つときますけどあたしつてけつこうモテるんですからね！？」

「つかつけ！マサニってやつに男だと間違われたばっかじやないか。」

「

「それはあんたの勝手な妄想の中でしょ！？それに、その辺のマサミくんにまさか出合つた時に告白されたんだから！」

「ハハー！？」

さすがにこの予想外な事実には一瞬困惑つたが、このくらいでオレの怒りの火山は止まらない。

「へ、へえ～。あんなオトコだかオンナだか分かんないやつならむしろお前にお似合いかもな！」

「言つときますけどカレー75センチあるのよ。バスケットプレイヤーなのに170もないかわいそなうなどつかの坊やよりも、心も体もずっと男らしいわよっ！」

「どうだかな～。ふつうバスケのマネージャーやりたいなら男子の方にはいれつつうの！なんだよソイツ、女子に囲まれても平気なようなナヨナヨしてやつなんかに男らしさで負ける気がしないねつ！」

「なんかモテない言い訳みたいでかわいそつ。たぶん心も体も豆粒みたいなあんたのせいでいつまでもマネージャーの女の子が入つてきてくれないのよ。」

「そ、そんなわけないだろーと、とにかくそんな女男と仲良くなじやねえぞ！」

「はつは～ん、図星だから急に話題を変えようとしてるでしょ。」

「ばかっ、ちがうつうの！そういう男はろくでもないって相場は決まつてんだから、オレはわざわざ忠告してやつてんだよ。勘違いすんなつ。」

「はいは～い、とりあえずあんたがヤキモチやくほどあたしにホレてるつてことはよく分かりましたよ～～

「だ～か～ら～」

「テレるなつてえ、大好きな女の子を独り占めしたいのは恋する男の子のサガなのだから」

「

ダメだ、途中から完全にやられっぱなしで言葉が出てこない。

「もう入っていいか?」

オレが黙っていると突然声がした。なんか声が低いのでこれはヒメじゃない。もちろんオレでもない。

「わるいな言い出しひべの先生が遅れちまつて。それにしても驚いたなあ、仲がいいとは思ってたけど、おまえらホントに付き合つていたとは。いやあ、イチャイチャしてるとこジャマして重ね重ねスマンスマン。」

「先生いつからセレーニティラッシュシャイマシタ?」

「えつ? タイガが小泉に、「おれ以外の男を見るんじゃない」的なことを言つてたあたりだが。」

忘れてた———。そうだ、元はと言えばこの担任が遅れてくるからこんなことになつたんだ。しかも会話を聞きだしたタイミングが最悪つ。やつべ、なんか勘違いしてるし…

「用件はすぐに済ますから、その後は一人っきりの教室でどうぞ」「自由にな。」

「先生違うんです。今のは恒例の漫才みたいなものとして、ねえタイガ?」

「そ、そうそう先生。ホントおれらがついにうんじゃなくてタダの親友つていうか。」

「わかったわかった、クラスのみんなには黙つておいてやるよ。今日の出来事はオレとおまえら一人の秘密にしてやるからな。」

けつぎよく、「おれって分かる『大人』だろ?」顔の先生のニヤニヤは止めることはできず、その後学級委員2人は顔を真っ赤にしながらさつさと仕事を終わらすことに集中した。

## 気になつちやつた姫

ピ

「今日の練習は終了でえへす」

このチャラい声にもだいぶ慣れてきたのかな。いつも練習の最後には4対4のミニゲームをするのだけど、今日は久しぶりに自分のプレーができた気がする。学級委員で遅れて時間短かつた分、体力有り余つてたからかな?

そんな違いをよく見ててくれているのが、われらがキャプテン。

「ヒメ～、みづやくセンターのヒースらしい動き出来てたじやない！」

「やつぱりそうかなあ？自分でも動きがキレキレだったのわかるのよね。」

「自分でその違いがわかるようになれば一人前ね。でもま、マサミくんのこと気にしてなきや今のヒメの実力ならこのくらいがフツーだと思うんだけどねえ～。さては本命のダンナ様になんか言われたとかあ？？」

「ち、違うつうの！」

まあ「ダンナ様」かどうかはともかく、アイツになんか言われたのは事実であるが。やだつ、思い出したらまた顔が赤くなつてきた。

「わつかりやすう～やつぱりヒメにはタイガくんの方がお似合いみたいつ。こりや修学旅行が楽しみだつ」

「ちよつ、レイ同じ班だからってなんか企んでふたりつきひとつにさせないでよ！？」

「なになに、それは「旅行中は2人だけにさせてくれ」つていうことと受け取りますがあ？」

「わあヒメちゃんダイターン！」

「付き合つてゐるアタシとカズキでもそんなことはつたり言へないよお。」

「そろいもやりつてウザい」といのつえなし。どうしてあたしの周りの人間はいつもヒトノハナシを逆に逆にどうよつとしたがるのかつ！

「ナニはなしてんすかあセンパイたちい？オレも混ぜくださいよお」

「いやあこればっかりはマサミくんには秘密なんだなあ～」

「そうそう、1年は1年同士で仲良くしてなよお～」

「うつわあ、つめたいなあお姉さんたち～。まあ別にいいんだけどね～。ヒナタちゃん、シズクちゃん、アイカちゃんマックいこ～」

「いじよ～」「おう～」「…」

「こりこりの聞いてると、この前の告白はどこまで本気だつたのかわからないな。ま、別にその方がいいんだけど。

それよりも気になるのはアイカだ。マサミくんのテンションについていけないつて気持ちはよく分かるのだが、さすがに無視はひどくないか？」

「ねえ、アイカつてマサミくんのこと嫌いなのかな？」

「う～んどうだる。でも他の一人が仲良くし過ぎなのは置いといて、たしかに一回もしゃべつてるとこ見てないつていうのは異常かも。「ちょっととアイカに話し聞いてみようかな。」

「え～それは気にしそぎじゃない？ヒメつておせつかいだよね～」

「あんたたちにはわからないかもしぬないけど、新しい人が入っちゃうと簡単にはなじめない子もいるのよ？」

「それって実は告白で動搖してたジブンの口を塞がるだじやないのよ？」

「一いやー、やするなー！決めた、あたし今日アイカと2人で帰るからー。」

「お好やこびりつねー。」

ところわけでアイカと2人で帰宅途中。

部活に関係ない話をしているときはいつも通り楽しそうにおしゃべりしていたのだが、マサミくんの話題が出ると急に黙ってしまう。「やつぱりああいう子苦手だった？ 実はあたしもなんだよねえ」。なんか告白のこととはヌキにしても、なんかあのかるうーいフンイキがどうも合わないっていうかさあ。まあでも話してみると意外といいやツだよ？あの子もあれで部を盛り上げようどがんばってるつてうのかなあ。とにかく今度マックでも一緒に行ってみたらいいじゃない。」

「…あの、違うんです。」

「へ？」

「実はアタシ、うまく男の子と話せないんですね。」

「え、それって他の男子でもそうしたこと？」

「はー…」

あたしなんかやつちやつたかな。そういうえば男バスの誰かと話しているの見たことないかも。女バスの中だとみんなに混じってフツーにしゃべってるから気づかなかつたな。

「でもどうして？あつわかつた。オト」「なんでミンナ野蛮よー。」とかつて感じ?」

「そ、それは…」

「「」、「めん余計なお世話だったね。そういうこともあるよな。」

いちおうマサニベには嫌つてゐわけじゃなくて、ただシャイなだけって伝えとくから。でもアイカもあいのりと返事くらいはしてあげなさいよ?」

「がんばってみます。」

そつと云つたアイカの笑顔はかわいかつた。この子をこんな笑顔にしてあげられる男子が、いつか現れてくれるといいなって思った。

「ありがとうございます。実はいままで誰にも言わずにちょっとと苦しかつたのもあるんです。ヒメさんに聞いてもらつて少し楽になりました。」

「そうへ~そう言つてもらえるとあたしも嬉しいかも。それじゃ、明日も練習がんばるためにおいしいたい焼きさんでも寄つてきますか。あたしあこしいお店知つてるんだあ。」

「はい~」

男マネが入つて浮かれているらしい女バスはどうか知らないが、バスケ一筋に燃える男バスは新チームになつて初めて練習試合が組まれた。

ほんとなら両手を上げて喜ぶところだが、ここで問題発生。それはリヨースケの発言から発覚した。

「先生、オレその日学校で科学館行くの決まつてるから出れなつすよ。」

「え、なにその行事？あたし知らないよ？」

「先生は文系クラスの副担任だからじやないっすか？理系の2年は全員行きますよ？」

「たしかアンタ達全員同じクラスだつたよね。つてことは5人ともいないつてこと？」

「いや、ウチのクラスだけ文理混じつてるんすよ。ちなみにオレも理系つす。」

ミノルまで？というか2年メンバーで一番数学ができないミノルが理系だつたことに驚いた。

「あ、それオレも応募したんで行つてきます。」

「ちょっと待つてマコトも？」

「先生どうするんすかあ。」

「いや、だいじょぶつしょ6人いるし。なんとかなるつて！」

黒谷先生たのもよ~

先生も忙しい中コーチしてくれてるからあまりはつきりと文句を言えないといのにもシラいが、いつもマネージャーの不在が悔やまれる。

べ、別にそれでも『マカミベニ』はひりやましくはないにけど。

当田6人で相手校に乗り込むことになった。

ちなみに新キャプテンはリョースケに決まったのだが、新チームお披露目の日に不在というこのグダグダぶり。

せりにこじで第2の問題発生。

試合前のアップ中、どうもカツヒサの動きが悪い。先生はカツヒサを呼んで額に手を当てるときつさが変わった。  
「アンタひどい熱じゃない！？」いくら無口だからっていつこじとはちゃんと言になさいよ！」

「いやだつてオレがいないと5人になるし、試合になんねえし。」

「さすがにこの熱じやできないわよ！」といつわけで今から病院行ってくるからあとはよろしく、アキヒト…」

「え、なんでおれに『よろしく』なんすか？」

「今からアンタ副キャプテンだから。」

「ええ～～

そういう言い残し、先生はカツヒサを抱いで去つて行つた。

残されたのはわずか5人。しかも監督なし。

「と、とりあえず。スタメンを囁うね。」

「いや、今ここにいるヤツ全員だら。」

アキヒト相当テンパつてゐるな。

「うつ。じゃなくてポジション発表する。問題なのはリョースケ以外にいないSGだけど、割とボール運びなんかができるエイジにやつてもらおうと思つ。あとはPGはオレ。SFタイガ、PFカズキ、Cアキラでいい。」

何気にカズキもヤフはやったことないが、この際そんなことは言つてられない。

そんな状態で試合は始まった。技術的にも精神的にも要であるリョウスケがないことが大きく、序盤からティフェンスは大崩れであった。それでもカズキを中心としてインサイドから得点を重ね、なんとか食らいついていく。

前半終わって、47-32

しかも後半はベンチのメンバーのいないこっちがキツくなつてくるのは目に見えている。あげく向こうのキャプテンから「あの～なんか今日ベストメンバーでもないようですし、もうやめますか?」

なんて言われる始末。

「いえ、やります。続けさせてください!」

そう言い切ったのはアキヒトであった。早くも副キャプテンとしての自覚が出てきたのか?

その決意ははつたりではなかつたらしく、後半からはアキヒトの指示が飛び、むしろ前半よりもディフェンスが機能し始めていた。

「よつやく相手の得点が止まつてきたな。これから反撃行くよ!頼んだからねタイガ!」

「おう!」

正直言つて今は走つてるだけでもキツイのだが、そんなこと言つてられない。だつて本番じゃこのチームの何倍もの格上を倒さなければいけないんだから。

アキヒトが3マーラインまで一気にドリブルで運ぶとカズキにパス。

すかさず相手もホール下でプレッシャーをかけてくる。

しかしカズキは一瞬オレのマークが外れているのを見逃さなかつた。  
よしつ。

ドリブルで空いているヒリアにつっこんでいく。前にはティフォンスが迫る。オレは素早くその場で止まってショートした。

オレの前に突っ立ったままのティフォンスの頭上を通り越してリンクに吸い込まれていく。

「つしゃあー」

その後も最後まで善戦するも、一歩及ばず負けてしまつた。しかし体力が限界の中やりきつた経験は決して無駄ではなかつたと思つ。

ただ、もう一度田は勘弁してくれ。

## 出発前にも一苦労な姫

いよいよ来週に迫ってきた修学旅行関係のことで毎日の授業はほとんど埋まっていた。

そして今日はその中でも、とっても大事な取り決めがあるのである。  
「じゃあ今から修学旅行中の自由時間の班決めをするから、各自3人組を作ってくれ。」

「はーい！」

そう言わると同時に、クラス中がいつもの仲良しメンバー同士で寄り集まっていく。

あたしはみんなの勢いにのまれて一瞬固まってしまった。早いトコロはもう3人組確定してドコに行くかで盛り上がっている。

やばい、完全に出遅れてしまつたあーー

「ヒーメ、一緒に組もつ

「レイーーー

「ちょ、ちょっと、息ができない…」

「い、『めん…』

「もう、抱き着かなくてもいいじゃん。あやうくアンタの起伏のない胸の中で窒息死するところだつたんだからー！」

この際ペちゃぱいをバカにされたことなど気にならない。

「やっぱ持つべきものは親友だあーー！」

「おおげさねまつたく。で、もう一人誰にしようか。」

「もう誰でもいいよーレイにまかせるー

「ホッとしきでしょアンタ。まあフツーに考えたら女バスの誰かつてことになるけど…」

周りを見渡すと、クラスの中でも飛びぬけてキャーキャーうるさい

一団が目についた。このクラスで一番目立ちたがり屋のギャル集団、通称「ギャルキュア」だ。わりと校則を守っている子が多いウチの学校の中で、金髪ありカレシ複数ありへそピアスありの5人組だ。

その中にアカネが混じっていた。たぶんあそこで3人×2で組む魂胆だろう。

「なんかあの中だとアシンメトリー・ヘアのアカネが清楚に見えちゃうね。」

「そうね…」

気を取り直してまた物色していると、こんどは逆にほんわかした空間を見つけた。そこにはミスズと、彼女に負けず劣らず優しい雰囲気の2人組、「文芸部シスターーズ」である。

ちなみに彼女2人はそれぞれテニス部とソフトバレー部でレギュラーとして目下活躍中であるが、その知的なメガネ姿でいつも2人で談笑をしている風貌から、誰ともともなくそう呼ばれている。せつかく人数ぴったりのグループができあがつてゐるのにジャマしたら悪いので声をかけるのをあきらめた。

「ていうかみんな女バス以外にも友達いるんだね。」

「いやそれくらい当たり前でしょ。ヒメが女バス5人つていう状況に甘えすぎ。言つときますけど、アタシだって他にも候補になる子くらいいたんだからね？」

「はい、レイ様にはいたく感謝しております。」

そんな時、起死回生の天使のような声がかけられた。

「ヒメちゃん一緒にグループにならない？」

「え、あたしでいいの？」

「うんあたし達2人しかいないくて困つてたんだよね。」

「えつ…でもあたしらも2人だからムリだわ、ごめんね。」  
せつかくのチャンスだったが彼女たちの方も別れる気はなかつたら  
しく、断念した。

その後も声をかけてくれる子はいたが（ちなみに全部レイの友達）、人数が合わなかつたりあたしが全然話したこともない子達だつたりで決まらずにいた。

「やっぱこういうのつて難しいね。あと残るはサアヤくらいだけど、見当たらないな…」

「そうだねえ。でもあの子かわいいから今頃ひつぱりだこになつてるかもよ？」

「それもそつかあ。そうするといまだに机で一人座つてるような子を誘うしかないかな。まあアタシは誰とでも仲良くできる自信はあるけど。」

「あたしもこの機会に新しい友だち作ろつかな。あれ、でもそんな子いないよね？ ていうか他のところは3人組できるみたいよ？ ウチのクラスの女子は18人だから余るはずないんだけど今日誰か休んでたつけ？」

「いや今日は全員出席してたはずだよ。おかしいなー。つてうわあー！」

何氣なく窓の外を振り返つたレイは急に大声を出した。

あたし達は今までクラスの隅の方から見渡していたのでてつきり全員が見えていたと思ったが、実はすぐ後ろにもう一つ席があつたのだ。

そしてそこに座っていたのは…

「サアヤ！」

「どうしたの、一人でそんなとこ座つて。」

「そりだよ友達のとこ行つてグループ作んないと。  
「だつてあたし友達いないし。」

沈黙。

「そ、そつかあー。じゃあアタシたちと一緒に組もつよー。ちゅうど  
一人足りなかつたとこだし。」  
「そ、そうね、友だちいない同士仲良くしそうかー！」  
「あんた達誘われてたの見てたから」

再び沈黙。

「も、もうそんなこと言わないで同じ部活の仲間同士仲良くしまし  
よつ。」  
「そ、そりよー！改めてようしくねー」

そのあと必死でなだめすかしてなんとかクラスで最後の3人組とな  
つたのであった。

## 浮かれ王子

「よし、全員出発時間間に合つたようだな。」

「はい」

「お前たちパスポートは持つてきたかあ？」

「はい」

聞いて驚くことなかれ

なんと我が翔泉高校の修学旅行先とはずばり、アメリカなのである

！！！

「これから飛行機に乗るわけだが、その前に手荷物検査と身体チェックがある。金属製のモノを持つてる人は事前に出しておくれよ。」

「

先生そのセリフ、学校で10回は聞いたつづり。今さらそんなの  
引っかかるやつなんていねえよ。

ピッピー

ん、なんだこの音？

なんか「ツツツツイおっさん」がわらわらと出てきたぞ？

あつそうか、誰かが金属検査でひつかつかったのか。バカだなあ、

誰だ誰だ？

つてオレえ！？

いやいや何も怪しいものなんか持つてませんけどー！？

「H e y ! Y o u % \* 」

やべえ、ナニ言つてんのか全然わからねえ！なんだよ、ポケットの中身出せっていうのんか？なんにも入つてないつつのー！

あれっ？

なんだこの固い感触。

えへ～なんでバターナイフが入つてんだよ？

今日の朝飯の時に間違えてそのまま持つてきちゃつた？？ いやありえないありえない！大体今日の朝飯は「ゴハン」に味噌汁に納豆っていうザ・日本食だつたし！

「つて、ちょ、ちょっとドコ連れてくんだよ？」

あいつ、ゴツイおっさん達がオレをどつか取調室的なところへ連れてこ  
うとしてやがる

「だからオレのじやないつひの」

いや、そんな言い訳が通用する相手じゃないな。っていうかバターナイフじゃたいして悪いことできないし！

「ノーカー！イツツバターナイフ！！」

パンに塗る動作を繰り返し、身振り手振りで必死でただのバターナイフであることを説明する。

ふうようやく分かつてくれたみたいだぜ。バターナイフは没収されたけど別にいいだろ。

しかしこの珍事、犯罪の臭いがするな。犯人はいつたい『どうやつて』オレのポケットに入れたんだ？いや、それより問題なのは『誰か』だ。

犯人は意外と速くに見つかった。ほとんどのやつがあきれ顔の中、大爆笑しているヤツが約1名。

ミノルめへ

「お返じじゃボケエ！！！」

オレの渾身のドロップキックは見事にミノルに的中し、見事に復讐を果たすことができた。

そのせいで、わざわざのおっさん連中にまた連行されたのだが後悔はない。

## サイトシーイング姫

「うわあスゴイ、みんな英語で話してるうー」「見てあそこ、ゴリマッチヨの黒人と金髪美人のカツプルだあ！」  
「あんた達バカね、アメリカなんだから当たり前じゃない。一緒に歩いてると恥ずかしいからもう少し離れててくれる？ あつ、ジョニーデップ似の超絶イケメンはつけーん！え、えっとエクスクーズミーーー！」

「アカネ、あんたが一番恥ずかしいよ。」

「アイムジャパニーズビューチフルガール！ えつなんか言つた？ なによ、そろいもそろつて暗い顔してえ。せつかくの海外旅行なんだからさあ、そんなおとなしくしてないで楽しみましょうよ！ あつ今度はブルースウィルス系のシブいおじさまよっ」

「よし、後始末はヒメに任せたつ

「ちょっとレイ、どこ行くのよつ。もうーーー！」

「ふ～。アカネ、せつかくの旅行なんだから景色とか見よつよ。」「景色なんか見たつて1ドルの得もないつつの！」

「イケメン見てても結局お金にはならないと思つけど。むしろ訴えられたらマイナスだし。アメリカつて裁判王国とかつて言つし氣を付けないと。」

「バカね、言葉のあやよーしかもなに裁判とか。あんたデカいくせに細かいこと気にしそぎなのよ」

カツチーン！小泉ヒメ、マジでキレる5秒前。

「そんなこと言わずにさ。ほら、ニューヨークつてこんな高くてオシャレなビルがいっぱい並んでるんだよ？」

「ビルなんて東京とか大阪にでも行つたときに腐るほど見れるじゃないー！でも白人イケメンは海外旅行中の今しか見れないのよー？」

田舎育ちのあたしにはビルも十分貴重なんだけどな。これよりま  
で田を引くものを見つけないとダメだなこりゃ。

「あつ、自由の女神見えてきたよ！うわ、こんなに大きいんだあ。

「そうね、アンタにとつては何かを見上げるってことは珍しいかも

ね。

「あつでも自由の女神も近づいたらヒメより少しあやかっただりして。

# 小泉ヒメのATフィールド崩壊。

「せっかくからおとなしく聞いてりや好き放題言つてくれおつて!」

「さあ、いたのち無事に？」

「は？ もしかしてアタシのアシンメトリーへアーディシフテンのそ

れ！？」

!

「アンタみたいなもつさい女には分からないでしょうけど、これが最新のオシャレだつづつの！ていうか人の外見バカにするとかサイテー。」

「どの口が言つとるんじゃボケえー。さつきから散々自分が言つたことはもう忘れてんのかつづうんだよ。異国に来てどんだけ浮かれとるんやつちゅうねん！」

「えつ? えつ?」

「やれ、さから屋にいた暴祖の口と手を今すぐ譲らんかい。」

「う、うめん、なんか言い過ぎたみたい。反省する。」

「分かればええねん。」

「ヒメセツキから何大声出してんのー? クラスのみんなだけじゃなくて周りのアメリカ人もドン引きしてるよ?」

「だからそれはこの女が悪いんじや。」

「なにそのキャラ、そんなヒメ今まで見たことないよ……」

「こんなのいつも通りのあたしじゃあ……ってあれ?」

怒りも収まつてようやく素に戻ったあたしさ、さつきまでの一連の流れを瞬時に振り返る。

振り返るとともに顔が熱くなつてくれる。

とてもじゃないけど今は顔なんてあげられないよ。

結局その後は一度もニコニコークの街を眺めなかつた。

どつから舞こ上がり上がっておかしくなつたのはあたしの方だったみたいだ。

反省したアカネとレイが隣で一生懸命街の様子を話してくれているのだが、一向に耳に入らなかつた。

## 見え張り王子

今日は待ちに待った自由時間の日だー!!ノルとアキヒトと一緒に自由の国アメリカを満喫するぜ!

しかし実はこの3人だけではない。誰が決めたか知らないが、女子とも合同なのである。

「つてまた例によつておまえか、ビリして毎回やつやつてオレと一緒にいたがるわけ?」

「はあ?くじ引きだからしようがないでしょ!うが!言つとりますけどあたしの方がアンタの100倍飽きてるんですけどー。」

「オレはその100倍だね!」

「あたしはその100倍だつづてんでしょうー。」

「もう旅行先でまでイチャつかないの、お2人さん

「イチャついてなんかなーい!ー!」

そんなこんなで6人で観光しているとなにかを見つけたのか、ミドルが急に走り出した。

「さすが本場アメリカだな。こんな街中にバスケのリングがあるぜ!」

「おひいいねえ、体動かしたくてしおうがなかつたんだよね。しかもこんなこともあろうかとボールもつてきてるんだなあこれが。こ  
れはやるつきやないな!」

「ちょ、ちょっとタイガ、ミノルまずいよお

「ナニ言つてんだよアキヒト、ほんとはおまえもやりたいって顔してるゼ!」

「そりだぞ、そんなんじや副キャプテン失格だぞ!」

「アタシもやりたーい!」

「いいねえレイちゃん、そうこなくつちやー！」

ちなみにサアヤちゃんは荷物を降ろしていち早く臨戦態勢である。

「ほり、ヒメも来いよ。」

「え～勝手にやつちやまざいんじやない？」

「ダイジョブだって。さては久しぶりにオレら男子とやるっていうんでびびってんだろ？」「そ、そんなわけないじゃない！いいわよ、相手してやるうじやないの。」

ちょりいなあ。

そんなわけで修学旅行先で急きょ30回始まった。

オレがショートに行いついたときサアヤちゃんにブロックされてしまい、ボールはボールとは逆方向に転がって行った。

「おーい、タイガ早くボール取つてこいよ。」

「わあってるよ！ あつ

顔を上げるとそこにはボールを持った黒人の外国人が立っている。というか今はおれらが外国人か。

「わりい、ボール取つてくれないか」

つて日本語で言つても通じるわけないか。とりあえずボールを指差して、バスしてくれというジェスチャーをする。

しかしその黒人は指先で「来いよ」と合図した後、おもむろにドリブルをしてこつちにつつこんできた。

へつ、なんだコイツもバスケットマンか。日本人なめるなよ、ゼッ

テー止めてやるー。

えつ？

気づいた時にはオレの左側を通り過ぎて、ソイシはそのまま「ゴールに向かつていた。あわてて追いかけようと振り向くと、同じように驚いて突つ立つている他の5人を華麗にかわし、そのままボールをリングにたたきつけた。

しばらく呆然としていると後ろから笑い声とともに英語が聞こえてきた。さつきの黒人とは別に、白人2人がこっちを見ている。  
「やべえ全然わからねえ。アキヒトなんて言つてんだ？」  
「うへんたぶんだけど、『なんだ日本人なんてこんなもんか、へたくそはさつせとどじでろよ。』って感じのこと言つてる。」

するとさつきの黒人があとの2人に近づいてなにやら話している。それからこっちを見て言った。

「『30-3でやろうぜ。せつかくだから相手してやるよ。その代りに負けたらそこの女の子達と『トーントセレブ』だつて。』  
「上等じゃねえかやつてやるよー……つて伝えてくれ。」  
「タイガなんかかっこわる。」  
「うるせえ！」

ひつじでおれ達は急ぎよ30-3の国際試合をすることになった。

ぜつてえまけねえ

## ただ見守るしかない姫

ゞ、ゞうしょー

タイガたち絶対勝ち目なんかないじゃん。さつきダンクした黒人がうまいのはもちろんけど、あの2人もなんか雰囲気あるし片方なんか2mありそうだもん。

「タイガ達だいじょうぶかな?」

「わかんない。でもとりあえず応援しなきやー。」

先攻は外国人チームみたいだ。一番小さい金髪の彼（といつても180はありそうだけど）がガードみたいだ。自分からドライブで切り込んでいつてうまくディフェンスを崩している。2m巨人は当然のごとくセンターで、あたしだったらあの威圧感だけで止めようとする気力すら持てそうにないな。

どうやらあの黒人はフォワードらしく、彼にボールを集中して攻めてきている。それにしてもバスを受けてからドリブルにむかうままでがすごくなめらかだ。正直そのプレーをずっと見ていたいと思われるくらいだ。

「あ、タイガまた抜かれた。」

ガシャツ！

リングがもう古いのか、ダンクを決めるとき体育館よりも大きな音が鳴り響く。なんだかそれが一層強そうに感じさせられる。それに比べてこっちでダンクできるのは180後半のミノルくんぐらいかな。でも2m巨人が相手だとシートするのも一苦労みたいだ。

「うわあまた決められた。かるうじて勝負になつてるのはアキヒト  
くんぐらいだけど、彼は点取り屋つてわけじゃないし厳しいかも。  
これじゃ勝ち目ないなあ、そろそろ『テートビ』に行くか考えなきや。

アタシはあの金髪くんがいいな、ちょっとイケメンだし。」

「もう何言つてんのレイ！こんなニコニヨークのど真ん中でどこの  
誰ともわからない外人となんて怖くて歩けないよ！」

「アタシが代わりに相手してくる。」

「サアヤも落ち着いて！さすがにアレの相手は厳しいよ。ここはア  
イツらを信じるしかないよ。」

でもあのアメリカ人3人、デカいだけじゃなくて小技もうまいんだ  
よな。うわっ、2m巨人がスクリーンかけてタイガふつとばされて  
る。

ドガシャッ！！

…やつぱダメかもしねい。

あの黒人の名前なんつて言つたっけ、忘れちまつた。結局オレは一回も点決められなかつたし。くそつ、フォワードとしてまだまだ実力が足りなすぎる！最近は実力ついてきたかなつて思つてただけに余計へこむわ。しかも「デートは冗談だよ。キミたちを本気にさせるためだけさ。」とか完全にバカにされてたんじゃねえか！でも実際本気だつたら責任とれなかつたわけでもあるんだけど。しかもあん時勢いでアンナコト言つちまつたし…「うわ、思い出しだけで頭ん中ワ　　つてなる！！もういっそオレを誰か穴に埋めてくれっ

「くらえ！」

「ぶへえつ。つてえなにすんだよミノル！」

「なつて決まつてんじやんか、修学旅行の夜つつつたらまくら投げっしょ。」

「今そんな気分じやないんだよーアイツらにボロ負けしたおかげではらわた煮えくり返つてるんだ。静かにしててくれー。」

「もうそんなど今考えてもしようがないじやんか。帰つたらまた死ぬ氣で練習する。とにかく今は楽しもうぜ。」

「ほんとオマエはのん気だよなあ。つたく、うらやましいぼほつ」

「タイガ、まくらはドコから飛んでくるか分からんんだぜ？」

「リョウスケ、なんでここにいんだよ？」

「部屋のヤツら女子んとこ遊びに行つちやつてヒマなんだよ。とい

うことでオレも混せてくれー」

「オマエも行つたらいいじやないか。」

「オレはバカ騒ぎがしたいの！つてわけで負のオーラ出しまくつてるタイガには罰として集中砲火の計だ。ミノル隊員、アキヒト隊員、部長命令で攻撃を許可する！」

「アイアイサーー！」

「職権乱用だろ？がテメエ……！」

もうじつは、たらやけくそだ、徹底的にまくら投げ込んだる！

「くらえべへつ、げほつ。ちよ、ちよまつて、3対1はヒキヨーだろー！」

「問答無用！」

「ちつ、今日はふんだりけつたりだな。だいたい、なんでアメリカ滞在の最終日が『旅館』なんだよ！ 昨日まではふかふかのベッドルームだつたつうのに！」

「そんな細かいこと言つてるから今日も一人だけ無得点なんだよ、へたれフォワードが！」

「くやしかつたらまずはオレらに枕ぶつけてみるよ、なんだ、シューートも外れりゃまくら投げも当たらないってか？？」

「もうあつたまきた！お前らがそつぐるなら容赦しねえぞ！？」 くらえー！！！

「オイバカつ、ふとんは投げんじゃねえよ！」

「つるせえ！」

バキッ！

リョウスケ達がとつさによけたのでオレが投げたふとんはその後方へ飛んでいく。そしてそこにあつたのはふすま、だったモノ。そう、ほんの数秒前までは『部屋のしきり』という役割をはたしていたモノ。

そのあと先生たちの部屋で正座させながら4人仲良く説教をくらつたのはいつまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7987u/>

---

センター姫とスマート王子

2011年11月26日17時53分発行